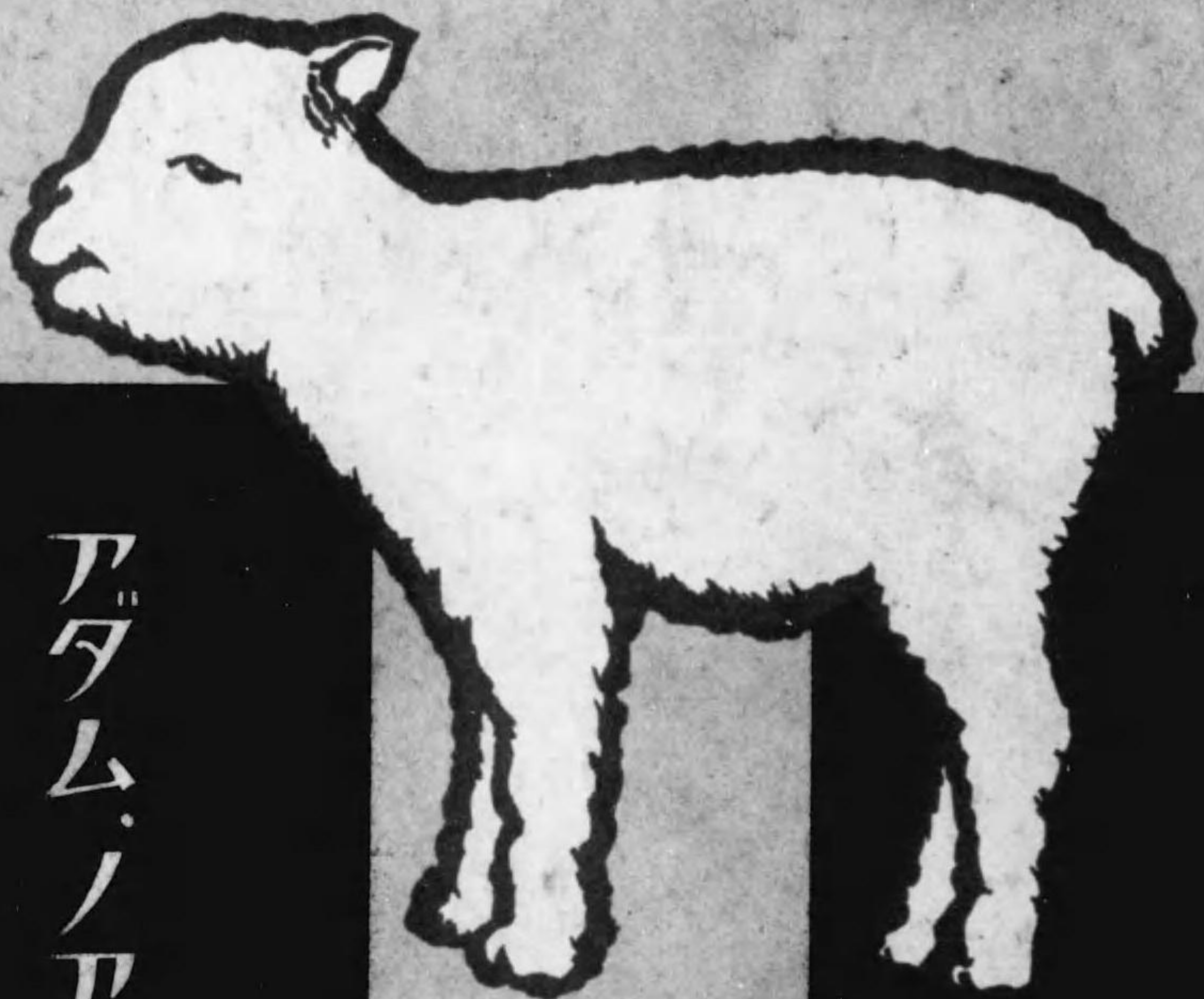


★
聖書物語
★

355
991



★
アダムのア
★

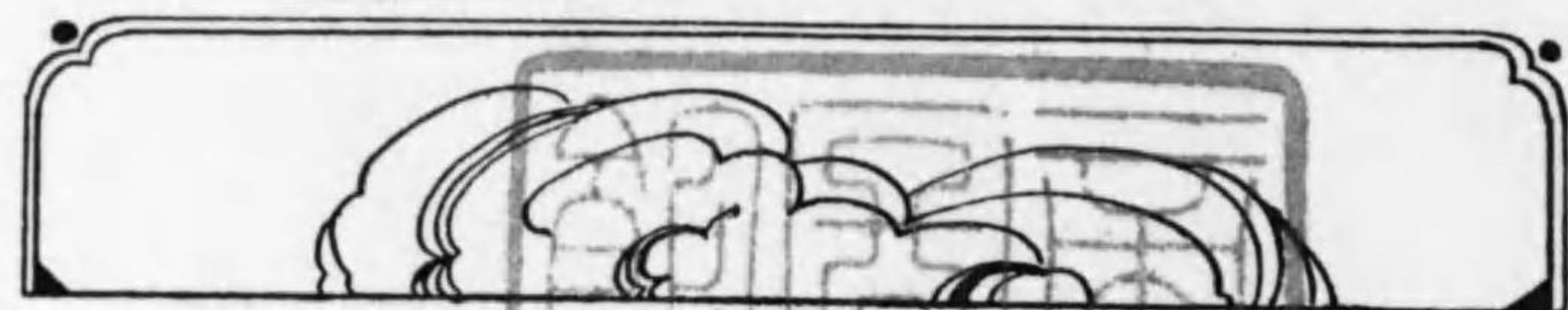


始



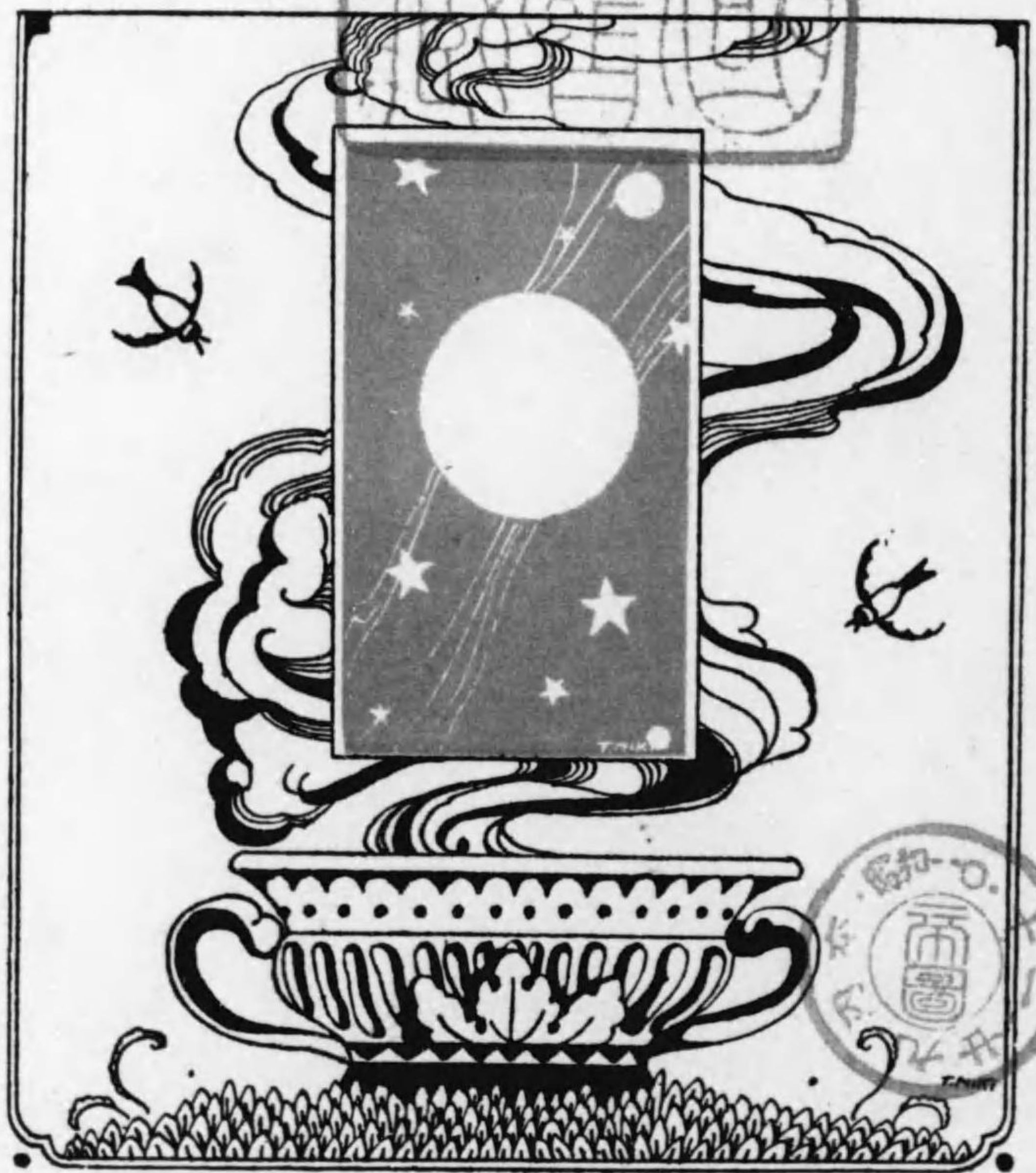
特234
332

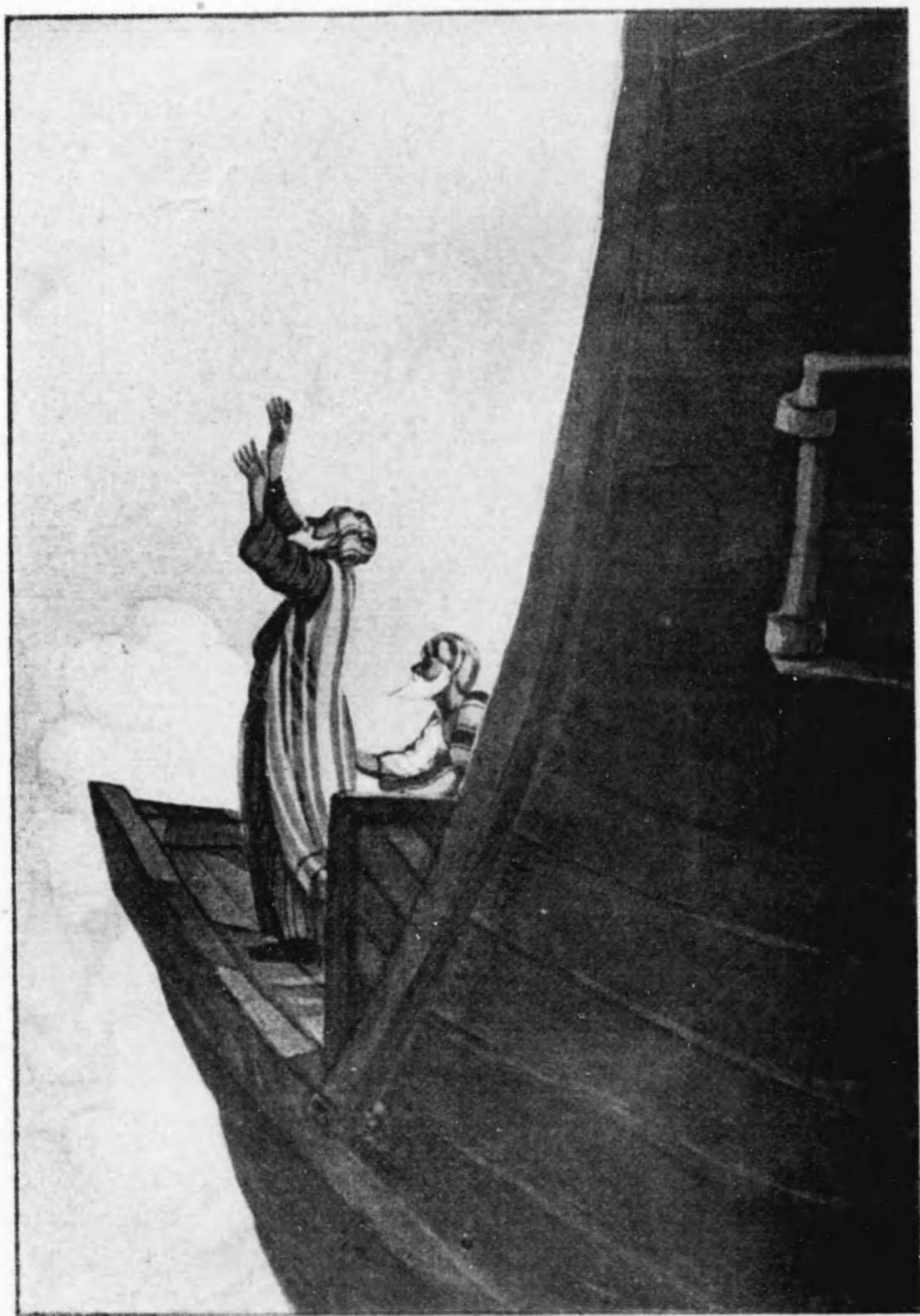
庫文教督基



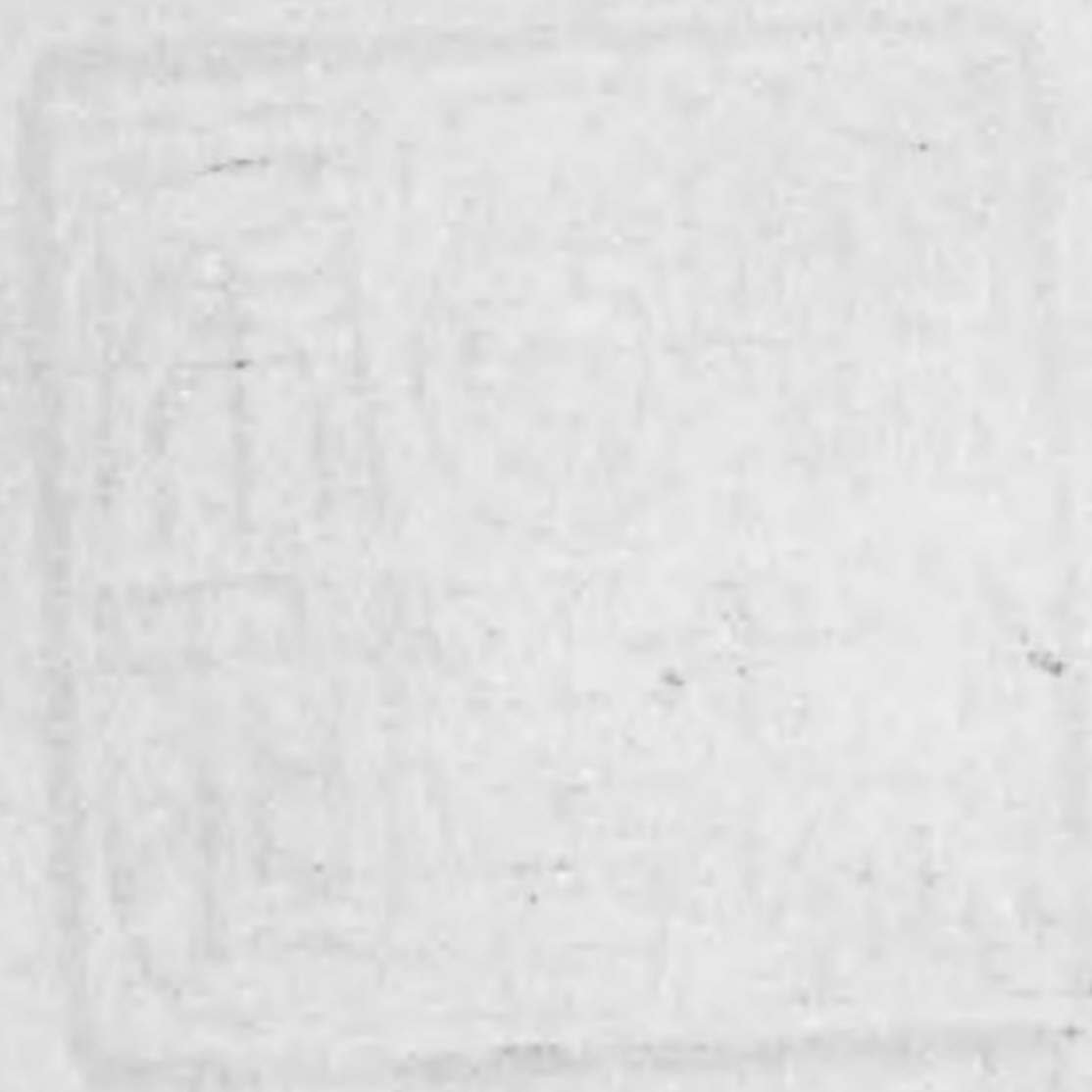
話物

★ ア ノム タア ★





つ放を鳩・アノ



目次

第一章 ふしぎな宇宙	一
第二章 天地創造	七
一、第一日	七
二、第二日	八
三、第三日	九
四、第四日	三
五、第五日	三
六、第六日	四
七、第七日	六
八、人間	七
第三章 エデンの園(上)	二

目次

目次

一、エデンの位置……………	二二
二、生命の木と智慧の木……………	二三
三、アダムの創造……………	二五
四、アダム、動物に名を與ふ……………	二六
第四章 エデンの園(下)……………	三三
一、アダムの孤獨……………	三三
二、エバの創造……………	三四
三、幸福な生活……………	三六
第五章 天使の墮落……………	四二
一、サタンの謀叛……………	四二
二、悪魔の誅議……………	四四
三、サタン陰府を脱出す……………	四七
四、サタン、エデンの園に入る……………	五〇

第六章 人祖の罪…………… 五七

- 一、怪しい蛇…………… 五七
- 二、智慧の木の果…………… 五八

第七章 樂園を失ふ…………… 六六

- 一、アダム、罪を犯す…………… 六六
- 二、アダムとエバ樂園を追はる…………… 七〇

第八章 カインとアベル…………… 七六

- 一、樂園を追はれた二人…………… 七六
- 二、アダム土を耕す…………… 七八
- 三、カインの誕生…………… 八〇
- 四、アベルの誕生…………… 八一
- 五、アベル、羊を牧ふ…………… 八三

目次

目次

六、二人の供へ物……………八五
 七、カイン弟を殺す……………八九
 八、カインの追放……………九二

第九章 カインとその裔……………九五

一、カインノドに住む……………九五
 二、はじめて出来た人間の社會……………九六
 三、亂暴な壓制者レメク……………九七
 四、武器の發明……………一〇一

第十章 セツとその裔……………一〇四

一、親孝行なセツ……………一〇四
 二、神様をうやまうたエノス……………一〇五
 三、神と偕に歩んだエノク……………一〇七

第十一章 大洪水(上)……………一一一

一、ノアの傳道……………一一一
 二、怖ろしい神命……………一一六
 三、ノア、方舟に入る……………一二一

第十二章 大洪水(下)……………一二三

一、大洪水来る……………一二三
 二、方舟アララテ山上に止る……………一二六
 三、鴉と鳩……………一二七

第十三章 新らしい世界……………一三四

一、ノア 方舟を出づ……………一三四
 二、新らしい契約……………一三七

第十四章 ノアとその子……………一四二

一、ノアの農業……………一四二
 二、ノア、葡萄を植う……………一四四
 三、ノアと葡萄酒……………一四七
 四、呪ひと祝福……………一五〇

目次

目次

第十五章 ハベルの塔 一五二

一、シナルの平野 一五三

二、大きな塔 一五三

三、言葉の亂れと人種に分れ 一五三

四、セムの子孫 一六六

解 説 一五九

基督教文庫

聖書物語 第一卷 アダム・ノア

蘆谷蘆村

第一章 ふしぎな宇宙

みなさん、私たちのすんでゐる、この天地は、何といふふしぎな、うつくしい、さうしておもしろいところでせう。

あの、きら／＼と、光りかゞやく、勇ましい、おごそかな太陽のふしぎさはどうでせう。私たちは、朝おきると、太陽の光を仰いで、太陽の光に照らされて、はたらきだします。夕方になると、太陽を山のむかうにおくつて、ねむりにつきます。太陽のあたたかい光のために、私たちは生きてはたらし、鳥やけものも育ち、木や草も生え、地球の上のすべての生き物が生きて居るのです。太陽は、ふしぎな光と力をもつて、私どもの地球を抱き、あたためてくれます。

けれども、その太陽は生き物ではありません。太陽には、心はありません。それは

大きな火の玉であります。それは地球の百四十萬倍の大きさのある火の玉です。あの黒點の上にある炎の嵐の高さだけでも、二十萬マイル以上もあるといふ、おそろしい火の玉であります。さうして、その太陽のところまでゆくには、どの位かゝるかといふと、一日に十里づゝあるいても、一萬二千年かかるのです。神武天皇さまが、高千穂峰をお出になつた時、一しよに太陽にむけて歩きだしても、まだ、やつと五分の一ほどしか歩けないほど遠いのです。さういふとほいところに、さういふ大きな火の玉がひつかかつて、私どもの地球を照らしてゐるのです。いゝえ、さうではありませんその大きな火の玉のまはりも、私どもの地球が、すばらしい速力でもつて、ぐるぐるとはしりまはつてゐるのです。どんなに早いかつて、ほとんど想像もできない位、一時間に、二萬七千里ほどの速力で、大空をはしりまはつてゐるのですが、レールも敷いてなければ、道もつけてない大空を、すこしもちがへずに、いつも同じ線の上をくるくと走りまはつてゐるのです。まあ、どんな上手な玩具屋が、どんな上手な器械

師が、そんなふしぎなからくりをこしらへだしたものでせう。

その太陽の光が、きらきらと地球を照らしますと、海の水は水蒸氣になつて空にのぼり、こまかい水玉になつて、かぎりの知られない青空に、もくもくとひろがつてゆきます。夏にはそれが大夕立となつて、川の水をあふれさせ、往來に瀧ができたり、湖ができたりします。冬にはそれがまつ白な雪になつて、こん／＼とふります。私たちはその中を走りまはつて、雪だるまをこしらへたり、雪いくさをしたりします。その雨や、雪で濕された土の中に、まかれた一粒の豌豆は、あたたかい春の日の光に照らされると、だん／＼ふくれたして、パチンとはじけます。さうして、小さい指のやうな形をした芽が、袋の外に出ます。まつ白い蠟のやうな色をしてゐたその芽はいつしか緑色になり、ぐん／＼とのびてゆきます。さうして、いつのまにか蔓が出て葉が出て、花がさいて、果がなるのです。どんなふしぎな力が、あの豌豆の中にはい

つてゐるのでせう。

みなさんは海邊で貝がらをひろつたことがありますか。あの貝がらの、いろ／＼さまざまな形と色、どんな細工師が、どんな繪かきが、あんなものをこしらへ、描くことができません。みなさんはまた、海邊にちらばつてゐる海草に氣をつけてごらん下さい。その色の多いこと、種類のおほいこと、おどろくほどです。さうして、人間には、その海草の一つをも、貝の一つをも、こしらへることはできないのです。

けれどもまた、人間といふものは、何といふふしぎなものでせう。人間は口をきくのです。お話をするので。それから字をかくのです。字をよむのです。人間でなくて、どこにお話をしたり、字をかいたり、本をよんだりするものがありますか。太陽は大へんな力をもつてゐます。太陽と人間とはくらべものになりません。けれども太

陽は口をききますか。字をよみますか。人間は小さいものです、弱いものです。けれどもいろ／＼なことを知つてゐます。考へてゐます。太陽は何も考へません、何も知つてゐません、たゞ火の玉ですから。人間はこまかい／＼、豌豆の粒を何萬、何億分することも知つてゐます。さうして、大きな／＼宇宙のことも知つてゐます。太陽よりももつともつと大きなこと——宇宙には私たちの太陽の、また何萬倍もある太陽がたくさんあるのです——をも知つてゐます。

このふしぎな人間は、どうして出來たのでせう。このふしぎな地球はどうして出來たのでせう。このふしぎな太陽はどうして出來たのでせう。うつくしい月、奇妙な星はどうして出來たのでせう。きれいな花を咲かせ、果を出す草や木はどうして出來たのでせう。おもしろい節で歌をうたつてはとびまはる鳥、野山をはしりまはる獸、さまざまの蟲、このたのしい、奇妙な、うつくしい天地のすべてのものは、どうしてで

きたのでせう。それを考へる人間の心はどうしてできたのでせう。

それは、ひとりでにできたのではありません。それをこしらへたものがあつてできたのです。大きな器械師が、大きな細工師が、私たちの考へのつかないほど大きなものがあつてそれをこしらへたのであります。それは何であります。だれでありますう？

神様！ さう、神様であります。これから、神様が、この宇宙をおつくりになつたお話をしませう。

第二章 天地創造

一、第一日

むかしむかしの大昔、世のはじめに、神様が天地をおつくりになりました。神様が、まだ天地をおつくりにならなかつた時には、青々とした空もなければ、地面もなく、お日様も、お月様も、星もなくて、まつくらの、かぎりのない、深い、淵のやうなところに、霧のやうな、雲のやうなものがたゞよつてゐるだけでありました。さうして、その上に、神様の靈が、丁度牝鶏が卵をあたためるやうに、おほひかぶさつてゐたのであります。

ひろいひろい、深い深い、かぎりのない、くらやみの淵、それはどのやうにさびし

い、おそろしいものであつたでせう。

神さまは、そのさびしい、くらいところをば、あかるい、にぎやかなところにかへやうとお思ひになりました。神様は、

『光あれ』

と仰せになりました。たちまち、まつくらの淵の中に、まばゆい光がきらきらとさしだしました。神様は、その光を暗の中から分ち、光を晝と名づけ、暗を夜と名づけなさいました。今まで晝も夜もなかつた宇宙に、はじめて晝と夜ができ、朝と夕ができました。さうして、それがはじめの日でありました。

二、第二日

はじめの日までは、かぎりのない、くらやみの淵の上には、霧のやうな、雲のやうなものゝたゞよつてゐるばかりでありました。それは天文学でいふ星雲のやうな、ガ

ス體のもので、やがてできる日や、月や、星や、地球の芽のやうなものでありました。神様は、その中に、蒼穹をこしらへようとお考へになりました。神様は

『水の中に蒼穹ありて水と水とを分けよ』

と仰せになりました。さうして蒼穹はできました。それは大きな鏡のやうな、光りかゞやく圓天井で、そのうつくしさはたとへるものもないほどでありました。暗黒の淵の上にたゞよつてゐた霧は二つに分れてかたまり、流れ、一つは圓天井の下にゆき地球となり、一つは圓天井の上について、やがて日や月になるのでありました。神様は、その圓天井をば『天』とお名づけになりました。さうして、それは二日目の日でありました。

三、第三日

地球は出来ましたけれども、今の地球とはまるでかはつて居りました。地の上には

水がいつぱいあつて、ひどくつめたたく、何ひとつ生き物とはありませんでした。神様はそのつめたい、つまらない地の上を、もつとおもしろいところにしようとお考へなさいました。で、

『天の下の水は一處にあつまつて、干いた土が現れよ』

とおつしやいました。さうすると、地の上にはでこぼこが出来、水はみんな低いところに流れこんで、高いところが水の上にはあらはれました。神様はそのあらはれたところを『地』となづけ、水のあつまつたところを『海』と名づけなさいました。

エホバは地を基のうへにおきて

永遠にうごくことなからしめたまふ。

衣にておほふがごとく

大水にて地をおほひたまへり、

水たゝへて山の上をこゆ、

なんぢ叱咤すれば水しりぞき

汝いかづちの聲をはなてば

水たちまち去りぬ。

あるひは山にのぼり或は谷に下りて

汝のさだめたまへる所にゆけり

なんぢ界をたてて之をこえしめず、

ふたたび地をおほことなからしむ。

—詩篇百四篇—

と昔の詩人の歌つたのは、このことでもあります。

さうして、地ができ上ると、神様はその上にたくさんの植物を生やせなさいました。それはいろ／＼な草や、穀物の生る草や、果のなる樹などでありました。つめたい水

におほはれてゐた、さびしい地の上には、みどりの草木が、いたるところに生ひしげり、水中には水の草が生えて、地の上はたいさうにぎやかに、うつくしくなりまして。それが三日目の日でありました。

四、第四日

そのつぎの日、神様は、大空の圓天井の上に、たくさんひかりの光の玉をつくり、大きな光を晝を司つかさどるものとし、小さい光を夜を司つかさどるものとして、日や、月や星をおつくりになりました。それが四日目でありました。

ほんたうは、それより前に、日や月ができてゐたのですけれども、それまでは地球の上に、一ぱいに霧がかぶさつてゐたので、日も、月も、星も見えなかつたのが、この日から霧がはれて、よく見えるやうになつたのだともいひます。

まつくらな、かぎりのない、大きな淵の中には光がさしだし、陰氣な、うつたうし

い霧だらけの世界は、わかれて、うつくしい、鏡のやうな大空の圓天井ができ、地の上は海と陸とにわかれて、みどりの草木が生ひ茂り、を、しい太陽と、やさしい月とは夜晝かはるく、に世界をてらすやうになりました。まあ、何といふかはりかたでせう。それが天地創造の四日目でありました。

五、第五日

さうして、世界は大さうにぎやかに、うつくしくなりました。けれどもまた動物はひとつもゐませんでした。水の中には一疋の魚もすまず、地の上には一羽の鳥もゐませんでした。そこで五日目に神様は、

『水には生き物がたくさんでき、空には鳥がたくさん飛べ。』

とおほせになりました。さうして、いろいろな魚、大きな、おそろしい海蛇や鯨、さまざまの鳥などをおつくりになりました。鯨は潮をふいて大洋の上を旅行してある

き、海蛇は、海の底から、大きな、ぬら／＼したからだをもたげ、鯛や、ひらめや、烏賊や、まぐろや、さまざまの魚は、潮にうかんでおよぎまはりました。川には鰻や鮎や、鮭やさまざまの魚がはねまはりました。空には、雁や、鶴や、烏や、鳩や、いろいろな鳥が、にぎやかな羽音をたて、おもしろい歌をうたつてとびまはりました。そのにぎやかなこと、一日のうちに世界は、まるでかはつてしまひました。神様はたいそうよろこびになつて、

『生めよ、殖えよ、海の水に充てよ、鳥は地に蕃殖よ。』

とおほせになりました。それが五日目の日でありました。

六、第六日

その次の日、神様はさらにあたらしい仕事をおはじめになりました。今までは、海の魚と、空の鳥とだけしかなくつたのですが、今度は地の上に、いろいろな生物をこ

さへなさいました。いろいろな野の獣、牛や馬のやうなおとなしい獣、蛇や蛙のやうな蟲、さういふ生物をおこしらへになりました。虎や、豹や、象や、獅子は熱帯の沙漠や、森の中をあゆみ、さむい北の國には狐や熊がうろつきまはり、あたたかい草原には牛や馬がやはらかい草をたべ、兎や栗鼠は木の間や岩かげをとびまはり、地の上は一層にぎやかになりました。神様はたいさうよろこびになりました。

けれども、神様は、もつと／＼よいものをつくることをお考へになりました。それは人間であります。

『たいさうにぎやかで、面白くなつた。しかし鳥や獣ばかりでは、まだ物足りないやうだ。もつとすぐれた生物を創造らう。それには、自分に似せて、自分の形のやうに人間をこしらへ、これに海の魚と、天の鳥と、地の獣と地にはふ蟲とを治めさせることにしよう。』

神様はさうお考へになると、土くれをまるめて、それを神様の形と同じやうにつく

り上げ、それに生命の息をぶつとふきこみなさいました。神様の息がかかると、泥人形はむく／＼とうごきだし、りつばな人間になりました。神様はたいさうおよろこびになつて、

『生めよ、殖えよ、地に充てよ、さうして地を治めよ、海の魚と、空の鳥と、地にうごく凡ての生物を治めよ。地の上にある、實のなる草と、木とお前たちの食物として與へるから、ほしだけ食べることがよい。また獸や鳥や、その他の生物には、地の青草を食物としてあたへる。』

と仰せになりました。それは六日目の日でありました。

七、第七日

かうして、天地とそのすべてのものが、六日目にすつかりでき上りました。神様はそのでき上つた世界をごらんになりますと、たいさううつくしく、にぎやかで、まこ

とにお氣に入りました。そこで、やれ一と休みと七日目にお休みになりました。さうしてこの日を特に神聖い日として聖別めなさいました。

神様の六日は、人間の六日とはちがふであります。それは六億年か、六百億年か六萬億年か、六千億年か、いや／＼、人間の頭では考へられないほどの、長い六日であるかもしれません。神様には、千年も、一分間にあたらないのです。

八、人間

土くれから生れた人間こそはふしぎなものであります。それは、からだこそは土くれでありましたけれども、その中に神様の息が入つてゐるのであります。その人間は、外の鳥やけものとは、まったく違つた力をもつてゐました。それは獸のやうに足があつてあるき、口があつて物をたべます。いろ／＼な點で、獸や鳥に似ては居りますけれども、本當はまるでちがつたものであります。鳥や獸には、神様の息は入

つてゐません、たゞ人間にだけ神様の息が入つてゐるのです。人間は鳥や獸には思ひもつかないことを思ひ、知り、行ふのでありました。形こそは小さく、質こそは土くれであります、人間には魂があります。そこで、よく外のすべての生物を治めてゆきました。

われなんぢの指のわざなる天を觀、

なんぢの設けたまへる月と星とを見るに、

世の人はいかなるものなればこれを聖念にとめたまふや。

人の子はいかなるものなればこれをかへりみたまふや。

只すこしく人を神よりも卑くつくりて

榮と尊貴とをかうぶらせ、

またこれに御手のわざを治めしめ

萬物をその足の下におきたまへり、

すべての羊、うし、また野のけもの

空の鳥、うみの魚、

もろもろの海路をかよふものをまで皆しかなせり。

— 詩篇八篇 —

けれども、この人間をまつてゐたものは、幸福ばかりではありませんでした。おそろしい、むごたらしい、苦しい、さまざまな運命が人間をまつてゐるのであります。人間はこれから後、どのやうなことをし、どのやうな歴史をこしらへるでせう。どのやうに賢くなり、どのやうに強くなるでせう。けれどもさうなつてゆくまでには、人間ははかることのできない苦しみをしてゐるのであります。神様にかたどられてつぐられ、すべてのものを治める力をさづけられた人間が、そのやうな苦しみや悲しみ

をうけなくてはならないことになつたのは何のためでせう。

それは、おそろしい罪のためであります。

人間の世界に、人間の心におそろしい罪が入つてきたためであります。

私はこれから、どうして人間の世界に罪が入つてきたかをお話しませう。さうして

私たちのほい／＼父母が、どのやうな苦しみをなさつたかをお話いたしませう。

第三章 エデンの園(上)

一、エデンの位置

はじめて造られた人間はアダムとよばれました。アダムとは『土から生れたもの』といふ意味の言葉であります。神様は、アダムのために、すみよい所を備へてやらうと思召しました。さうしてエデンといふところを選んで、そこにうつくしい花園をおこしらへなさいました。

そこには清らかな泉が滾々とわきだし、園の中をめぐる流れ、草木をうるほし、それが四つにわかれて、四つの河となつてゐました。その一つは、ピソンといつて、うつくしい金や、碧玉のたくさんあるハビラといふ國をめぐる流れてゐました。ハビラ

とは多分今のインドのことで、ピソンといふ川は、ガンジス川のことであらうといはれて居ります。もう一つの川はギホンといひ、クシといふ國をめぐつて流れて居りました。クシといふのはエジプトの昔の名で、さうすればギホンといふのはナイル川だらうといふ説もありますが、更にクシといふのは。パピロニアの地方の名であらうといふ人もあります。第三の川は、ヒテケルといつて、アツスリヤの東の方へと流れました。これは今のチグリス川であります。第四の川はユーフラテ川でありました。それはノアの大洪水よりもずっと昔のことですから、地球の上の地形も、今とはまるでちがつてゐたでありませうが、とにかく、中央アジアの高原の上に、うつくしい、ゆたかな、祝福にみちた人類のふるさとがあつたらしく、聖書の記事ではおもはれるのであります。さうして、近ごろの學者の意見は、聖書のこのいひつたへと一致して、人類のふるさとは、中央アジアの高原地方で、それから全世界に人間がわかれて出たのだと申します。

神様は、このエデンの國の東の方に、うつくしい園をおこしらへになりました。そこにはきれいな花が、いつもくさきみだれてをり、おいしい果實が、枝もをれるほどなつてをりました。おそろしい暴風雨は、この國にはいつて來ず、世はいつまでも春でありました。

二、生命の木と智慧の木

この美しい園のまん中に、神様はふしぎな木を二本お植ゑになりました。その一つは、『生命の木』でありました。これは、人間にかぎりなき生命をあたへる木で、その果をたべたものは、いつまでたつても年もとらなければ死ぬこともないのであります。

もう一本の木は、『智慧の木』また『善悪を知るの木』といふ木でありました。これは大へんかしこさうな、よい木のやうでありますが、ほんたうは、飛んでもない悪い

木でありました。なせかといふと、この木の果をたべると、人間は、善いことと悪いことを知ることができるようのです。善いことを知るといふのは、ほんたうは悪いことを知ることです。なせかといふと、人間が、もし、悪いことを知らなければ、善いことを知りやうはありません。人間の心に、わるいことが少しもなければ、人間のすることとは善いことばかりで、善いことがあたりまへなのですから、どんなに善いことをしても、それを善いこと、知りやうはありません。つまり善いことを善いと知るのは、人間の心に悪いことがあるからです。智慧の木は、人間の心に、悪いことを教へる木でありました。それをたべると、人間は悪いことが判つてきます。さうしてそれをたべると、どうしても死ななくてはならないのでした。たとへ生命の木の果をたべて、不老不死になつても智慧の木の果をたべるとだめになつてしまふのです。なんとけんのんな木ではありませんか。神様はどうして、そんなあぶなつかしい木を、エデンの園のまん中にお植ゑになつたのでせう。それは、私たちに分らない、ふかい〜御

かんがへから起つたことでありました。

三、アダムアダムの創造

土から生れたアダムは、神様から息をふきかけられて、はじめて生きた人間になりました。アダムはばつと目をあけてあたりを見まはしました。まあ、そこには、どんなにめづらしい世界があつたでせう。大きな赤ん坊のアダムは、おどろきとよろこびに、心をどらせました。

その時、あかるい光が、神様のみ顔からさしだして、アダムのからだをつゝみました。アダムは、たいさうよい氣もちで、じつと神様のお顔を見てゐました。

神様はにこ〜とお笑ひになつて、
「さあ、アダム、起きなさい。お前は私の形に似せてつくられた人間だ。お前は世界のあるじだ。私はお前のためによい住居をこしらへておいたよ。さあ、こちらへ來な

『はい。』

神様はさきに立つておあるきになりました。アダムは、神様のあとについて、いそいそとあるきだしました。

やがて神様は、エデンの園に、アダムをつれてお入りになりました。

『さあ、こゝがお前のためにこしらへた住處だ。こゝに住みなさい。さうしておさうちをしたり、草や木の手入れをしたりするのだよ。それから、園の中にある木の果はどれでも取つてたべてよいが、ただ善悪を知る木の果だけは、とつてたべてはいけない。いよ。そら、こゝにある、この大きな木がそれだ。こんな大きな葉をしてゐて、こんな和い果が生つてゐるから、すぐに判る。これをたべると死んでしまふのだ。死ぬといふのはどんなことだか、お前にはちよつと分るまいが、失くなつてしまふことだ。お前はもと土からつくられたものだが、今は私の息が入つてゐるから、生きて人間になつてゐる。死ぬと私の息はなくなつて、お前はもとの土くれにかへつてしまふのだ。』

よ。死ぬといふことはつまらないことだ。せつかく私にこしらへてもらつても死んでは何にもならない。だからこの木の果をたべてはいけないよ。きつと氣をつけなさい。』

『はい、よく分かりました。けつして取りません。』

と、アダムはお答へしました。

『お、よく分つた。ちやあ、その邊の木の果をたべてごらん。そら、これは林檎だ。どうだ、おいしいだらう。これは梨だ。これはぶどうだ。どれもこれもお前のたべものとして、ごくよいものだ。お腹のすいた時にはこれをおあがり。お前のお腹には、まだ何もはいつてゐないから、きつとお腹がすいてゐるだらう。ちよつとこの林檎をたべてごらん。』

『はい。』

アダムは、手をさしのべて、うつくしい、まつかかな果をもぎ取りました。さうして

それをたべました。そのおいしいことは、ほつべたがおちてしまつたかと思ふやうです。さうして、それをたべると、からだ中に、手にも、足にも、力がみちみちて、はちきれさうになるのゝありました。

「どうだ、おいしいだらう。……それから私はお前のためにもつといろくなくよいものを備へてあるのだ。ちよつとまつておいで。」
神様はさういつて、エデンの園をお出になりました。

四、 アダム・動物に名を與ふ

アダムは、ぼつつりとたゞ一人、園のまん中の、生命の木のかげにすはつてまつてゐました。

やがてしばらくすると、園の外から、神様のみ足の音がきこえました。それにつゞいてたくさん生き物の足音がきこえました。アダムは、そんな音をきいたことがな

いものですから、何だらうかしらと、ふしぎに思つて、目をはつて、その音のする方を見つめました。

神様のお姿が、園の入口にあらはれますと、そのあとにつづいて、たくさん生き物が、いろくさまざまなきき物が、ぞろくぞろくとやつてきました。

長いく、四尺も五尺もある鼻をもつた象、ふさくした、たてがみをもつてゐる獅子。……

きれいなまだらな毛皮をもつ虎。……あつたかい外套をきてゐる熊。

大きな角のある、力のつよさうな牡牛。いさましくいななきをあげる馬。

やさしげな目をした羊。びよんくはねまはる兎。長い尾をもつてゐる栗鼠。

いろくさまざまが獸な、行列をつくつてぞろくぞろく園の中にはいつてきました。アダムは、見たこともない、ふしぎなものがたくさんやつてきたので、あつげにとられて口をばかんとあけて、見とれてゐました。

神様は、アダムのそばにおいでになつて、

『ほら、アダム、ごらん。これが私のつくつたけだものだ。お前と同じやうな生物だけれども、お前のやうに私の息がかゝつてゐないから、魂をもつてゐない。お前はここのけだものたちを治めるがよい。このけだものたちに、お前のすきなやうに名をつきなさい。』

とおほせになりました。

『まあ、ありがたうございます。それでは名をつけて見ませう。』

アダムは、けだものたちの行列の前にすすんでゆきました。けだものたちは、アダムの姿を見ると、飼犬が主人をむかへるやうに、みんなくんと鼻をならし、尾をふつて、よろこばしさうにあまへました。アダムは、その頭を一々なでてやつて、
『おゝ、いゝ子だ、いゝ子だ。これから仲よくあそぼうな。お前たちも仲よくしなさいさあ、みんなに名をつけてやるよ。よくおぼえてお置き、そら、お前は象だ。長い鼻

のは象だよ。お前は獅子だ。お前は虎だ。お前は豹だ。お前は熊だ。お前は狸だ。お前は狐だよ。お前は牛だ。お前は馬だ。お前は兎がよからう。お前は鼠とつけよう。お前は栗鼠がよからう。お前はもぐらもちだ。』
と、ひとつ／＼名をつけました。

『おゝ、みんな名がついたか。ではたのしくおあそびなさい。よくアダムのいひつけを守りなさい。』

とおつしやつて、神様は天へおかへりになりました。

第四章 エデンの園(下)

一、アダムの孤獨

アダムは、うつくしいエデンの園に、たのしくすんで、たくさんとりの鳥やけものを手下したにして、くらしめてゐました。けれども、さびしくないことはありませんでした。何故なぜといつて、アダムは、ひとりぼつちなのです。鳥やけものは、たくさんゐても、よく、アダムに馴なれて、アダムのいふことをきいてくれても、アダムと同じ人間ではありません。アダムに話はなすることもできません。神様は、アダムを可愛かがつて下さいますけれども、神様は神様です。人間ではありません。人間には、人間の仲間なが入用なのです。

鳥とりでも、獸けでも、ひとりぼつちでゐるものはありません。みんな親子おやこがあり、兄弟あにがあり、夫婦あづかがあるのでした。アダムは、自分じぶんばかり、たつたひとりぼつちなのをあやしました。さうして、なんといふことなしに、さみしく感じかんてなりませんでした。それに、アダムが、木や草くさの手入れていれをしたり、花園はなぞののおさうちをしたりするにも、たれひとり一いっしよに仕事しごとをしてくれるものはないのです。

『どうして僕ぼくばかりひとりぼつちなのだらう。ほら、あの小鳥こどりは、二羽ふたでいつしよにはたらいて巢すをこしらへてゐるではないか。あの狸たぬきだつて、二疋ふたひきして穴あなをほつてゐる僕ぼくはどうしてひとりぼつちなのだらう。どこにか、僕ぼくと同じやうな人間にんげんがゐるのではないかしら。どこからか、ひよつくりやつてきて、僕ぼくの手傳てつたひをしてくれるのではないかしら。』

そんなことを思おもひながら、アダムは、ひとり、木きのかげをあるいてゐました。神様かみさまは、はるか高たかいところから、それをごらんになりました。

『うむ、人間といふものは一人ではゐられないものなのだ。私がさういふ風にあれをこしらへたのも。よし、あれのために、仲間をこしらへてやらうぞ。』
と、神様はおほせになりました。

二、エバの創造

あたゝかい太陽の光をあびて、アダムは園の中をあるいてをりました。そのうちにふと、何といふことなしに、ねむたくなつてきました。どうしても、ねむくて、仕方がないので、アダムは木のかげにころがつて、ぐうぐうとねむつてしまひました。いく時間ねむつたのか、よつほどねむつたと思ひましたが、はつきりしませんでした。うつらうつらとねむつてゐる中に、アダムは神様の足音をききました。アダムはいつものやうに、起き上つて、神様を拜まうとしましたけれども、からだは石のやうにこはゞつて、少しもうごくことが出来ませんでした。する中に、神様は、しづかに

アダムのそばに近寄つておいでになりました。さうしてアダムのわきばらのところへ手をおやりになると、するくと何かひきださなさいました。何かと思つて見ると、それは一本のあばら骨でありました。ふしぎにも、それをひきだされても、ちつとも痛くありませんでした。神様は、外のところから筋肉をあつめて、そのあばら骨をつたあとの穴をふさいでおしまひになりました。

奇妙なことをなされるものだ、とふしぎに思ひながら、見てをりますと、神様は、そのあばら骨を、両手でぐるぐるとおしまるめなさいました。かたい骨は粘土のやうにやはらかくなりました。神様はそれでもつて、小さいお人形をつくり、それにはツと息をふきかけなさいました。さうすると、それがひとりの人間になつて、ひよこ／＼うごきました。

夢かしら、うつ／＼かしら、とアダムはあやしんでゐましたが、やがてまた、うとうととねむりこけてしまひました。

しばらくたつて後、アダムはあーッ！と大あくびをして目をさました。さうしてあたりを見まはしますと、あッ！とおどろきました。それは、さつき夢で見たとまるで同じい、ひとりの人が、つい、自分のそばにすはつて、じつと自分を見てゐるのです。

その人は、アダムと同じやうな人間でしたが、またアダムとちがつたところもありました。その人は、アダムよりも、もつとからだが小さくて、きやいやで、やさしく見えました。髪の毛もアダムよりはやはらかでした。色もアダムよりは白うございました。さうしてやさしい、鳩のやうな目をして、じつとアダムを見てゐるのでした。

『まあ、それではさつき夢かと思つたのは夢ではなかつたのだな。神様が私のさびしがつてゐるのを見て、この仲間をこしらへて下さつたのだ。さうく、神様は、私のあばら骨をおとりになつたやうだつけ。』

アダムは、思はず、手をのべて、あばら骨の上をさはつて見ました。あばら骨のあ

とには、穴をうめた新しい肉がありました。

『さうだ、これこそ私の骨の骨、私の肉の肉だ。私にとっては一ばん大切なものだ。これは男から生れたものだから、女と名をつけよう。』

さう考へた時、その女は、アダムにむかつて、

『あなた、どなた？』

とき、ました。

『私はアダムだよ、私ははじめてつくられた人間だ。さうしてお前は私の脇腹から生れたのだよ。』

とアダムは答へました。

『まあ、さう！』

女は、まだよく、そのことがのみこめない様な風で、アダムの顔を見つめてゐました。

『さうだ、神様が、私の骨をとつて、お前をこしらへて下さつたのだ。さうしてお前を私の助け者に下さつたのだらう。今に神様におうかゞひすれば何でもわかるよ。』とアダムはいひました。

その時、神様が、二人の前におあらはれなさいました。

『さうだ、それはお前の助け者として私のつくつたものだ。お前たちは、もともと一つのものなのだから愛しあはなければならぬ。男よ、お前の中から出た女を愛せよ。女よ、お前は男からつくられたものであるから男をうやまひ、男にしたがへ。お前たちは、二つで一つなのだ。一つで二つなのだ。』

と神様は仰せになりました。二人は、神様にお禮を申し上げました。

すつと後になつて、アダムは、その女にエバといふ名をつけました。それは、二人がエデンの園にすまなくなつてからのことですのですけれども、こゝには、お話のしよいために、やつぱり女の名をエバとよんでおきます。

三、幸福な生活

アダムとエバは、それからのち、エデンの園にすんで、仲よく暮らしてゐました。みなさん、アダムとエバはどんな人だつたと思ひですか。アダムも、エバも、私たちと同じ様な人間であつたにはちがひありません。けれどもまた、私たちとは大へんちがつてゐました。第一、アダムとエバは、私たちよりも、よつぽどうつくしくて、けだかくて、愛らしい顔をしてゐました。神さまの息を直接にうけたアダムやエバのからだからは、神さまの力、神さまの光、神さまの靈が、ふしぎな御光になつてかゞやいてゐました。

アダムとエバは、風をひいたり、お腹をいたくしたり、そんな厭な病氣といふものをちつとも知りませんでしたし、いつまでたつても年をとるといふことがありませんでしたから、死ぬこともありませんでした。

アダムとエバは、悪いことを少しも知りませんでしたから、したがって心に悲みとか苦しみとかいふものがありませんでした。アダムとエバばかりではありません。鳥もけものも、今のやうにあらあらしくありませんでした。人を見てかみついたり、ほえついたり、にげだしたりするけものはなく、みんな人間の友だちとなつてあそびました。まあ、何といふ幸福な世の中であつたでせう。

けれども、こゝに、アダムとエバの幸福をねたむものがあらはれました。それは何ものでせう。次の章でおはなしいたします。

第五章 天使の墮落

一、サタンの謀叛

神様は、人間や、生物をおつくりになる前に、人間や動物とはちがつた生物をおつくりになりました。それは、人間とよく似たやうなものでありますけれども、人間のやうに肉體をもつてゐずに、靈のからだをもち、人間のやうに地の上にはばられてゐずに、いつでも、どこへでも自由にゆくことができ、人間よりも、はるかにかしくはるかに力づくよく、はるかに神様に近いものであります。それを私たちは天使とよぶのであります。神様は、人間や、生物や、月や、星や、すべて神様のおつくりになつたものを守り、また神様のなされるみ業を助けさせるために、たくさんのお天使をおつ

くりになつたのです。

この天使のことについて、聖書にはくはしくかいてありませんけれども、昔からつたはつたいひつたへがあります。つぎにそのことをお話しいたしませう。

それはまだ、この世がつくられず、アダムやエバがつくられない大昔でありました。たくさんのお天使たちの中に、サタンといふ、えらい天使がありました。それは大天使ミカエルや、ガブリエルや、ウリエルなど、おなじやうに、天使たちの首領としてつくられ、外のお天使たちをさしづして、神様のためにいろいろな仕事をしたのであります。ところが、このえらい天使のサタンは、神様が自分を大切になさるのにつけ上り自分の力に慢心して、自分も神様のやうにならうと考へたのであります。

お、何といふ、おそろしいことせう。神様はたゞ一人しかありません。神様の前には、誰れ一人、立つことはできないのです。人間でも、天使でも、どんなものでも、自分を神様とすることができませんか。それはおそろしいことでありました。

そのおそろしい大戦争は、天にはじまりました。ミカエルの率ゐる善い天使と、サタン様に対して謀叛の旗をあげました。

神様は、それをごらんになると、大天使ミカエルにいひつけ、サタンを征伐させなさいました。

おそろしい大戦争は、天にはじまりました。ミカエルの率ゐる善い天使と、サタンの率ゐる悪い天使の大軍勢は、入りみだれて戦ひ、そのすさまじい勢ひには、空の星もうち落されるばかりでありました。が、神様にそむいたサタンが、どうして勝つことができませんか。たうとう善い天使たちのために、さんざんにうちまかされてしまひました。

敗けたサタンと、その仲間はどうなつたせう。

彼等は悪魔になつてしまひました。昨日までは、曙の星よりもうつくしく、光りかがやく姿であつたサタンとその仲間の天使どもは、みにくい、きたない鬼のすがたに

かはりました。さうして、くらやみの淵の底に設けられた、さびしい、つめたい、くらしい陰府の牢獄に、はうりこまれてしまつたのです。まばゆい神さまの寶座のもとに榮えとよろこびにとりまかれてゐた、今までの身の上にくらべて、まあ、何といふみじめなかはり方でありませう。

二、惡魔の謀議

くらい陰府の底へはうりこまれたサタンは、手下の惡魔どもをよびあつめました。その聲をきゝつけて、陰府の底のあちこちから、はひだしてきた惡魔どもの姿を見ると、どれもこれもまつくろな、きたない顔、けものや蟲のからだ、牛の頭や馬の頭、火のやうに光る目——汚れた心をそのまゝにかはりはてた姿なので、みんな顔を見あはせて、今さらのやうにおどろきあひました。

『おゝ、何といふかはりはてた姿だ！』

サタンはまづ叫びだしました。

『これが、昨日まで天上の榮華の中に光りかゞやいてゐたわれ々だらうか。だが、失望してはならない。いやしくも神様に叛かうとするほどのわれ々だ。一度や二度失敗したからといつて凹垂れるやうなことでどうする。おれはどんなことをしても、初の目的をしとげる決心だ。お前たちもその決心でしつかりしてくれ。さうしてふたたび天をとりかへさうではないか。』

悔ゆることを知らない惡魔どもは、サタンの言葉をきくと、皆、

『さうだ、さうだ。おれたちは凹垂れないぞ。どこまでも戦ふぞ。』

と力味かへりました。サタンは大さうよろこんで、

『おゝ、皆その元氣ならば大丈夫だ。そこで相談があるのだが、これから直ぐにまた天へ上つて行つて、正々堂々と戦争をはじめるのがよいものか、それとも外に何か神様と戦ふうまい謀ごとを考へだすか。どちらにしたらよいものかよく考へてくれ。』

悪魔たちは、それをきくと、てんでに考へをのべました。今すぐ天へ上つて行つて勝ち誇つてゐる天使たちの油断してゐる隙を討たうといふものもあれば、いや／＼、それよりは、ゆつくり準備をととのへて戦争をはじめるといふものもあり、意見が區々でなか／＼きまりません。その時一疋の悪魔が、いひだしました。

『いや、みんなの意見は、それ／＼尤もだ。だが、私は今ちよつと考へたことがあるそれは昔から天にひとつの言ひつたへがあるのだ。それは、神さまが、いつか、新しい世界をおつくりになつて、われ／＼とは違つた何か新しい生物をつくられるといふことだ。何でも昔の預言によると、もう、今頃が、その時に當つてゐるらしいのだ。もしか、神様に、さういふ企てがあるとすれば、それを邪魔して、神様にしかへしをしようではないか。どうだ。』

『ふむ、なるほど、それは耳よりの話だ。』
とサタンはいひました。

『さういへば、たしかにさういふ言ひ傳へのあるのを、おれはすつかり忘れてゐた。いや、こいつはよいことを考へついたぞ。では早速、その預言が本當かどうかを確かめよう。だれか、その使をするものはないか。』

しかし、これは中々重いつとめでした。第一、この陰府をとびだすことだけでも、なか／＼一通りの仕事ではありませんのに、もしか外の天使に見つかつたなら、どんな目にあはされるかも知れません。我こそは、進んでその大任をひきうけようといふものが、さすがの悪魔にもないのでした。で、サタンは考へた末、
『だれも引きうけるものはないかな。なければおれがやつて見よう。』
といひだしました。

三、サタン、陰府を脱出す

サタンは、手下の悪魔たちに別れて、たゞ一人陰府の門にやつて來ました。さうし

て、その門番をだまして門の戸をあけさせました。陰府の外には、かぎりのない暗の淵がよこたはつてゐて、「夜」と「渾沌」とが、そこを占領してゐました。サタンは「渾沌」にみちびかれて、その暗の淵をわたり、やつとのことで空に出ました。さうして、やがて太陽系のはづれまでゆきつきました。そこには、天使ウリエルが、太陽系をまもつて、番をしてゐました。

ウリエルの姿を見たサタンは、

「や、あそこにウリエルがあるぞ。見つけれられたら百年目だ。何かよい工夫はないかな。うむよし、ちよつと天使にばけてやらう。」

わるだくみを、ひとりでにかんがへだしたサタンは、たちまち、一人の小さい天使にばけて、ぶう／＼しくウリエルのところへとんでゆきました。

ウリエルは、とつせん目の前に、小さい、可愛らしい天使があらはれたのを見て、
「おや、お前はどこから來たのだ。」

とき、ました。サタンは、しらばつくれて、

「私は神様のところからきたのです。ウリエルさま、私は神様が、今度あたらしくおこしらへになつたといふ世界と、人間とを見たくつてきたのですよ。その世界は、それはそれはうつくしいところだといふではありませんか。さうして、その、人間といふ生物は、それは／＼幸福な生物だといふではありませんか。神様のみ業はほんたうにふしぎですね。あの悪い、謀叛をした悪魔どもを天から追ばらつて、そのかはりに人間をおつくりになつたといふのは、何といふよいお考へでせう。私はその幸ひな人間と、その新しい世界を見たくてたまらないのです。ちよつと一目でもい、から見たくてたまらないのです。どうか見せて下さいな。」

と熱心にたのみました。ウリエルは、天使の七人の首領の一人でありましたけれども、サタンの上手に化けた姿を、見破ることができませんでした。

「お、それほどまでに見たいのなら見るがよい。さうして、神様のみ業をほめなさ

い。さあ、道ををしへてあげよう。』

ウリエルは、だまされるとは知らず、天使に化けたサタンに、地球へゆく道を教へました。サタンは大よろこびで、いそいで空をとんでゆき、地球の端に飛び下り、だん／＼とエデンの園に近づきました。

四、サタン、エデンの園に入る

やがてサタンは、目ざすエデンにつきました。さうして園のまはりを取りかこんで出来てゐる垣根をとびこえ、園の中にはいりました。さうして、まづエデンの園とはどんなところか、様子を見やうと、あたりを見まはしますと、大きな／＼生命の木が黄金色の果をたくさんつけて、園のまん中につつまつてゐるのが見えましたので、たちまち身を一羽の鳥にかへ、その木の上にとびあがつて、園のけしきを見わたしました。

はじめて見た、エデンの園の美しさ。そこは神様が、ゆたかな祝福をもつて、天と地とのあらゆる善いものを満たして、おつくりになつたところですから、まつたく目をおどろかさすばかりうつくしいところでありました。水晶よりも清い四つの川は、たとへやうのない音楽をかなで、園の中を四方に流れ、うつくしい花はさきみちて、たかい香が空にたゞよひ、すべてのものは、神様の靈光にとりまかれて、ひかり輝き、かつて天上の榮華を見なれたサタンの目にも、たゞびつくりするの外はないのでありました。

『まあ、何といふ美しいところだ。』

とサタンはひとりごとをいひました。

『それにしても、我々のとちこめられてゐる、あのみじめな陰府と、この美しい世界とのちがひはどうだ。この美しい世界の主となるといふ、その人間といふ奴はいつたいどんな奴だらう。』

いま／＼しさうに舌うちをして、つぶやいてゐる時、むかうの木のかけから、たのしげな話聲がきこえて、やがて二人の人間が、森の間の小道にあらはれました。

『あツ、あれがさうだ、あれが人間だ。』

首をのばして人間の姿を見たサタンは、ますますおどろきました。神様の像になぞらへてつくられた人間、そのうつくしさ、そのけだかさ、サタンはついぞこんなものを見たことがありませんでした。

『ふーむ、これが人間か。こいつらはたゞの土から生れたのだといふではないか。こんな奴めらのために、こんなりつばな世界をこしらへ、その主として、せいたく放題をさせておくとはいま／＼しい神様だ。何とかして、こいつめらを、おれたちの仲間仲間にひきいれてやらうぞ。』

おそろしい目を爛々とかゞやかして、サタンはアダムとエバとをにらみつけてゐるのでしたが、二人はそんなことゝは知らず、さまたのしさうに話しあひながら、木か

げの道みちをあるいてゆきました。

サタンは、木からとび下りると、今度は一疋の鹿しかにからだをかへました。さうして草の中をそろ／＼と歩みながら、二人の話のきこえるほどの距離で、あとをついてゆきました。アダムは、そんなことは知らず、しきりにエバと話をしてゐました。

『ねえ、エバ。何と神様のお恵みはありがたいではないか。こんなうつくしい園をおこしらへになつて、私たちに下さるのだから。私たちはたゞ土くれからできた、つまらない、いやしいものなのだよ。それなのに神様は私たちに、こんなよいものを下さつて、このすべての生物を、私たちの自由にして下さるのだ。ほんたうに私たちは自由なのだ。何でも自由なのだ。たゞ私たちに禁められてゐるのは、あの智慧の木の果をたべることだけだ。神様は、私たちが、神様のいふことをよく守るかどうかを試すために、あの木の果だけはたべてはならぬとおつしやるのだ。あの果をたべると死ぬるんだとさ。死ぬるつて、どんなことだか、僕は知らない。けれども、とにかくよ

くない事にはちがひない。たゞその一事だけで、あとは私たちは何でも自由なのだ。ほんたうに神様は何といふありがたいお方だらう。それでも、お前のゐない間は、私は何だかさびしくて、おさうぢをしたり、木の手入をしたりするのが、骨が折れたがお前が出来てからは、何をするのも面白くなつたよ。ほんたうに神様はありがたい。この御恩を忘れてはならないよ。』

『ほんたうにさうですわねえ。私は、はじめて生れた時のことをよくおぼえてゐますよ。私は何も知らないで、園の中をあるいてゐました。さうしたら大きなお池のふちに出たのです。その中をのぞいて見ると、一人の女がゐて、私の顔を見て笑つてゐました。私も笑ひましたよ、私がかうすると、その女もいってゆくのです。私がそばへよると、その女もそばへよるのです。私は何か、その女に話しかけました。さうすると神様のお聲がきこえましたよ。それはお前のかげだ。お前の仲間はずらゐるから、こつちへおいでつて。そこで私は神様のあとについて行つたのです。さうしたらあなた

がねていらつしやいました。よくきいたら、私はあなたの肋骨からできたのですつてねえ。私はあなたの骨の骨、肉の肉ですわねえ。』

二人で仲よくいろいろ話をしてゐるのをきいたサタンは、いま／＼しくてたまりません。やさしい鹿の姿をしながら、腹の中では、にえくりかへる嫉みの火をもやして、ひとりでつぶやいてゐました。

『けしからぬ奴どもだ。憎らしい奴どもだ。ひどい目にあはしてやらう。うむ、よしよし、考へがあるぞ。』

サタンは、しづかに、木かげにかくれてゆきました。アダムとエバとは、尙もしきりに話しあひながら、あるいてゐました。

やがて日は西の山のかたむいて、しづかな夕ぐれがきました。黄金いろの夕日は、園の木々をうつくしく染め、小鳥たちはねぐらにいそいで、にぎやかにとびます

アダムは、エバの手をとつて、深い木かげの、うつくしい薔薇の花にとりかこまれたやほらかい草の小家へかへつてゆきました。

第六章 人祖の罪

一、怪しい蛇

そのあくる日のことでありました。

エバはたつたひとり、花園のおさうちをしてみました。エバは、いつもアダムと一しよにはたらくのですが、その日にかぎつて、二人別々なところではたらいてゐたのです。その時、一疋の蛇が、かさ／＼と草の葉音をたてて、エバの近くにはひよりました。

その頃は、地球が呪はれてをりませんでしたから、毒のある蛇や、人にかみつく猛獸などは一疋もすんでゐませんでした。すべての鳥も、獸も、蟲も、アダムとエバの

前におとなしく従つてゐました。それですから、エバには、何ひとつおそろしいものはありません。蟲や、けものが、草の中をはひまはるのは、常のことですから、蛇がはひだしてきても、心にもかけませんでした。

けれども、その蛇は、どういふわけか、いつまでもエバのまはりをはひまはつて、はなれませんでした。で、エバも、ふしぎに思つて蛇を見ますと、それは、うつくしいまだらの模様のある小さな蛇で、鎌首をもたげながら、しきりにエバをながめてゐます。さうして、おじぎをするやうに、頭をさげたり、さも感心したやうに、首をまげたりする様子がいかにかはつて見えましたので、エバはますますふしぎに思つてじつとその様子を見ました。すると、さらに一層ふしぎなことには、その蛇が、とつせん人間とおなじやうに口をききだしたのです。

「エバさん、貴い女王様、私がおんなにしてゐるのを見て、ふしぎに思召すのですか決してふしぎなことはありませんよ。だれがあなたを尊まないものがありますか。あ

なたはこの世の中で一ばんうつくしいお方でございます。あなたは神様のやうにうつくしく、天の榮えをうけていらつしやいます。生きてゐるもので、何一つ、あなたの美しさに見とれないものがありますか。あなたは數知れぬ天使にかしづかれる女神様でございます。あまりあなたが美しいので、すつかり見とれてゐました。お氣にさほりましたならどうぞおゆるし下さいませ。」

「まあ、これはどうしたことだらう。蛇や、お前はどうして人間の言葉を話すことができるの。神様は人間にだけ言葉をあたへて下さつたので、外の生物は口をきくことができないときまつてゐるのに、どうしてお前は口をきくことができるの。」

エバは、あまりの不思議に、目をまるくして、蛇を見つめました。すると蛇はぬかぬ顔で、

「はい、この世の女王様、美しいエバ様、その御不審はごもつともでございますが、何でもないことでございます。私は前には、外の獸や蟲とおなじやうに、何も知らな

いものでございました。たべるものといつては、青草ばかり、考へることといつては食べたり遊んだりすることばかりで、高尚なことは何一つ知らなかつたのでございます。ところがある日のこと、私が園の中をあるいてゐますと、むかうの方に、とてもうつくしい、おもしろい木がなつてゐるのが見えました。その果は、眞紅な上に金色の光を帯びてゐて、おもしろい匂ひが、ぶん／＼と風にふかれて匂つてきました。私はたまらなくなつて、その木の下にゆきました。その木はかなり高い木でありました。そこには外のけものたちが、もう匂ひをかぎつけてあつまつてゐましたけれども、何しろ高い梢の上にあるのですから、取ることができません。私は幸ひに、こんなからだで、どこへでもものぼつてゆけますから、すん／＼のぼつてゆきました。外のけものたちは、さもうらやましうにながめてをりました。

私は、とう／＼その木の上へのぼり、うつくしい、紅い果を、おもふさまたべました。さうすると、思ひがけないことには、私の頭の中に、今まで少しも分らなかつた

ことが分り、今まで考へもしなかつたことが考へられるやうになりました。そればかりでなく、人間とおなじやうに、口をきくことができるやうになつたのでございます。今までは、土の上をはひまつて、ものをたべることより外には何も考へられなかつた私が、地のことも、天のことも、月のことも、星のことも、神様のことも、天使たちのことも、何でもかでも分るやうになりました。たゞ、からだだけはもとの蛇でございます。少し物足りないやうな気がいたします。

『まあ、それはすゝぶんふしぎですねえ。そんな木がどこにあるの。この樂園はともひろくて、たくさん木があつて、私たちのまだ知らない木がいくらでもあるのだから、よくさがしたら、すゝぶんかはつた木が見付かるでせうよ。その木はどこにあるの。教へておくれ。』

とエバはいひました。

『女王様。その木はそんなに遠くではありません。これから少し先きの方の、泉の近

くの、月桂樹の叢のおくにあるのでございます。お望みならば、お伴いたしてもよろしうございます。』

『さう、それではつれて行つておくれ。』

とエバがいひますと、蛇は先に立つて、ちよろ／＼とはひだしました。

二、智慧の木の果

エバは、蛇のあとについて、いそ／＼と歩いてゆきました。やがて蛇が、

『女王様、この木でございます。そら、ごらんないませ。あのおいしさうな果を。』

といひますので、ふと見上げますと、そこに立つてゐたのは、智慧の木——善悪を知るの木でありました。

『あゝ、いけない。いけない。』

エバはおどろいて叫びました。

『蛇や、この木の果はたべてはならないのですよ。この園の中にある木の果は、どれだつてたべてもよいのですけれども、この木の果だけはたべてはならないのです。たべると死んでしまふと神様が仰せになりました。さあ、行きませう、行きませう。』

『まあ、ほんたうに神様は、さうおつしやつたのですか。ああ、私ははじめて分つたお、神聖なる木よ、智慧を興へる木、學問の母！今私はお前の力を私の裏に感ずる。私には何から何まですつかり判るやうになつたぞ。天地の女王様、死のおどかしなんかを信ずることはお止しなさい。どうして、この木の果をたべて死ぬることなどがあるものですか。ほら、ごらんない。私はこの木の果をたべましたけれども死なないではありませんか。神様は、あなたの目がひらけて、神様と同じやうになるのをいやがつて、そんなおどかしをおつしやつたのですよ。ほんたうに蟲の私でさへ、人間と同じやうになるのですもの、あなたがこの果をおあがりになれば、神様と同じになるのはあたりまへのことです。ですけれども、どうしてそれが悪いこととせう。かしこ

くなるのはよいことではありませんか。善いことを妨げるなんて、そんな神様はありません。神様がそんな正しくない神様なら従ふ必要はありません。そんなことはありませんよ。神様はきつとあなたの勇氣を試すために、さういふことをおつしやつたのでせう。たべてごらんさい。おいしいですよ。おいしいですよ。』

丁度、その時はまひるごろで、エバは大きうおなががすいてゐました。おいしさうな果物のにほひは、ぶんぐと匂つてきて、エバをさそひました。

『ほんたうに、左様いはれば、左様だわね。お前の死なないのが何よりの證據だわね。それにお前のやうな蟲でさへ、人間と同じやうになれるのだから、私たちがたべたら神様のやうになれる筈だわね。私は神様になりたいわ。女神になりたいわ。たべて見ようかしら、たべて見ようかしら。』

エバの手は、いつのまにか木の枝までのびてゐました。眞紅な果はその手にもぎとられました。一口、その果をたべたエバは、

『まあ、おいしいこと、まあ、おいしいこと。』

と、たゞ夢中で、のこりをたべてしまひました。

その時、蛇の姿は、どこへか見えなくなつてゐました。ふしぎな蛇——それこそはおそろしい、にくらしいサタンの化身であつたのです。

ああ、おそろしいサタンのはかりごとにおちいつて、私たちの最初のお母様は、神様のおいひつけにそむき、禁斷の果實をたべてしまひました。その時に、罪が——死が、人間の世界にはいつてきたのであります。悪いお母様、しかし可哀さうなお母様 私たちは、氣の毒なエバのために、いつしよに泣きませう。

第七章 樂園を失ふ

一、アダム罪を犯す

アダムは、エバのかへりがおそいので、心配をして、むかへにできました。やがてむかうの橄欖の木のかげから、エバの愉快さうな足音がきこえましたので、

『ああ、来た来た。』

と走りだして、エバをむかへました。見るとエバは、右の手に、眞紅な果實を一つもつてにこくして走つてくるのです。

『どうしたの、すゐぶんおそかつたねえ。』

と、アダムは言葉をかけました。

『え、今日はふしぎなことがあつたの。』

『どんなこと？ その果實は何なの。』

『これあの果實ですよ。』

『あの果實つて、どの木？』

『そら、智慧の木の果ですよ。』

『えッ？ 智慧の木の果、何だつてそんなものをとつてきたのだ。そんなものに手だつてつけてはならないよ。お前は神様から禁められてあることを忘れたの。え、エバどうしたの。』

アダムは、びつくりして、せきここんでたづねました。

『私、たべたのよ。この果を。』

『えッ、たべた？ 智慧の木の果をたべた？ 何だつてそんなことをしたのだ。エバお前は気がちがつたのか。』

アダムは、ひつくりかへるほどおどろいてエバの手をとつて叫びました。

『いゝえ、まあきいて下さい。かういふわけなのです。』

エバは、蛇があらはれて話をしかけたこと、それから智慧の木の果をたべたことをくはしく物語りました。

『ね、これをたべて死ぬといふのはうそですよ。蛇だつて死なないではありませんか私だつて、このとほり、しやん／＼してゐるではありませんか。それに、私、これをたべてから、とても／＼利口になつたやうな気がしてよ。まるで今まではちがふわ神様のやうに利口になつたわ。あなたも一つおあがりなさいよ。私、馬鹿な人さらいだわ。』

アダムは、エバのいふことを、尤もなやうでもあり、まちがつてゐるやうでもありどう考へてよいか分かりませんでした。神様があれほど堅くお禁めになつてゐるものをとつてたべるといふことは、たとへ、どの様に賢くなるにもせよ、決してよいことでは

はないと思ひました。けれども、一方から考へれば、エバが、そんなに利口になるのに、自分がいつまでも愚かものであるのは、たえきれぬことでありました。

『ね、あなた、お上りなさいよ。とてもおいしいんですよ。』

エバはそばからすすめました。

アダムは、ほつとため息をつきました。

『困つたな。困つたことをしてくれたな。しかし、もう過ぎてしまつたことは、いくら何といつても取返しがつかないや。お前は死ぬかも知れないよ。お前は永遠に亡びて、神様のお顔を仰ぐことができないかも知れないよ。しかしお前一人を死なせはしない。お前は私の骨の骨だ、肉の肉だ。お前が死んで私一人生きてはゐられない。私もお前と同じに罰をうける覺悟だ。』

さういふと、アダムは、實をとつて、むしや／＼とたべてしまひました。おいしいともまづいとも何の感じもなしに。

さうして、私たちの一ばんはじめのお父様も、亡びの道をたどりました。エバが可哀さうなら、エバの巻添へをくつたアダムは尙更可哀さうではありませんか。私たちは、アダムの切ない心をおもつて泣きませう。

二、アダムとエバ樂園を追はる

アダムとエバが、智慧の木の果をたべた時、二人のからだには、もう死が入りました。二人のすがたは、もう前のやうな、榮光ある、けだかいすがたではなくなりました。二人のからだからさし出してゐる、靈の光はきえてしまひました。今までは見やうとしても見られなかつた、恐れ、不安、疑ひの暗い影が、二人の顔にあらはれてきました。

それまで、二人は、すつばだかでありましたが、自分のすつばだかなことを知りませんでした。ところが、智慧の木の果をたべると、ふしぎにも裸であることに気がつき

ました。そして、大きな無花果の葉でもつて、きものをこしらへ、それを着ました。やがて、日がもう大分西の方にかたむいて、あたりが涼しくなつてきた頃、神様はエデンの園においでになりました。いつも神様のお足音がきこえますと、アダムとエバは、まつさきに飛びだしてきて、お迎へするのですが、今日にかぎつて、どうしたものか二人とも姿を見せませんので、神様はふしぎに思召し、

『アダムよ、どこに居るか。』

とお呼びになりますと、アダムは、

『私は裸でございますから、御前に出ることができません。』

とお答へしました。その聲のする所へ行つてごらんになりますと、一むらしげつた森のかげに、アダムとエバは、無花果の葉をかぶつて、ちゞこまつてゐました。

神様はそれをごらんになつて、

『誰がお前に裸だといふことを教へたか、お前はあの、食べてはならぬといひつけた

果實をたべたのだらう。』

と仰せになりました。アダムは怖るく、

『あの、あなたが私に下さいました女が、私にそれを食べさせましたから。』

と申上げますと、神様はエバに、

『お前は何故そんなことをしたのか。』

とおききになりました。

おごそかな神様のお聲にせめられて、さすがのエバも、自分の犯した罪の怖ろしさをさとり、ふるへて泣きながら、

『だつて、あの蛇が私をだまして食べさせたのですもの。』

と答へました。

神様は大さうお怒りになつて、蛇をおよびだしになり、

『お前は悪魔の手先になつて、こんな悪い事をしたから、すべての野の獸や家畜にま

さりて呪はれる。お前は一生腹這つて地の塵を食べるがよい。私はお前と女の間、お前の子孫と女の子孫との間に恨みを置く。彼はお前の頭を碎き、お前は彼の踵を碎くであらう。』

またエバに向つて、神様は仰せになるやう、

『お前は罪を犯した罰に、苦しんで子を生むやうになる。そしてお前は夫にしたがひ

何でも夫のいふことをきかなければならぬ。』

またアダムにむかつては、

『お前は妻のいふことをきいて、私の命令にそむき、私が食べてはならぬといつた果實をたべた。汝のために地は呪はれる。お前は一生苦しんで土を耕し、それから食物を得なければならぬ。土からは棘や、薊や、わるい草が生えだして、お前の邪魔をするであらう。お前は顔から汗を流してはたらし、終には土に歸らなければならぬ。お前は土から出来たものだから、土にかへるがよい。』

神様はさうおつしやつて、それから皮衣をこしらへてアダムとエバに着せ、エデンの園からおひだしておしまひになりました。エデンの園の入口には、ケルビムといふ天使と、ひとりではまはる焰の劍とを置いて、誰にも中へ入れぬやうにしておしまひになりました。

美しい、楽しい、幸ひなエデンの園は、かうして人間から取り去られてしまひました。悪魔は「仕て遣つたり」と赤い舌をはいて、陰府の牢獄ににげてゆきました。けれども神様のお心の中には、それよりもすつと前から、もうこの事のあるのはお分りになつてゐたのでありました。そればかりではなしに、末の世に神様のおん獨子を地の上に下して、エバの裔と生れさせ、悪魔の頭を打ち砕いてエデンの園をとりかへし生命の木の果を人類にあたへるおんはかりごとまで、ちやんとお心の中にてたてられてゐたのでありました。それは、人間が、土から造られた、生きたお人形のやうなもの

でなしに、自分の自由でもつて、自分の心から、ほんたうに神様にしたがひ、神様の聖旨にかなふ者となるために、必要なことなのでありました。さうすることによつて神様の榮えが増し、人間のねうちが上るのでありました。人間が、ほんたうに神様の愛を知るために、それがせひ必要なのでありました。

第八章 カインとアベル

一、樂園を追はれた二人

今朝までは、うつくしい、楽しいエデンの園で、くらべるものもないほど幸ひな生活をおくつてゐたアダムとエバは、たつた一日で不幸の底におちこみました。かぎりなく生きることの出来る筈であつた二人は、今や「死」の奴隷となつたのです。二人の額には「死」の影があらはれました。ああ、なつかしいエデンの園、そこには、生命の木の果がみごとに黄金色の光をはなつて、枝ををれるばかりになつてゐるではありませんか。二人は言ひあはせたやうに、エデンの園の入口をふりかへつて見ました。そこには、おそろしい天の使が、いかめしい目に二人をにらみつけて立つてゐま

す。おそろしい焔の剣が、ぐるぐると火の環をかきながらまはつてゐます。二人は、はつと胸をおさへて、またにげだしてゆくのでありました。

エデンの園を出て見ると、あたりの眺めはまるでかはつてゐました。うるはしい花がさきにほひ、みごとに果實が、とりきれぬほどなつてゐる、たのしいエデンの園に比べて、それはまた何といふかはり様であつたでせう。地には石くれがまじり、荆棘や、いらぐさが足をいれるところもないほど茂り、毒をもつた蟲は、遠慮もなしに二人の足を刺すのでありました。二人はあまりの境遇のかはりやうに、手をとつて泣きました。昨日までは、天の使に仕へられ、神様の深い愛のうちに、めでいづくしまれた二人……今日はあれはてた異境のさすらひびとなつてしまはうとは……。

けれども、いくら泣いたところでとりかへしのつかぬことでありました。いくらわめいたところで、誰れ一人相手になつてくれるものはありませんでした。そこには二人をなぐさめる天の使もありませんでした。神様は、とほく／＼離れて立

つていらつしやいました。

天も、地も、二人の叫びに答へてくれませんでした。

二、アダム土を耕す

『もう泣くことは止めよう。』

アダムは、エバにむかつていひました。

『いくら泣いても仕方がないのだ。私たちは、私たちの播いた種を刈らなければならぬのだ。私は神様の仰せになるとほり、この固い土を耕し、この荆棘やいらぐさと戦つて、私たちの食物を得ることにしよう。お前はお前で、はたらきなさい。さうして一心に神様のおいひつけを守つてゐたならば、神様も私を亡ぼしなさいはすまい。さうしていつかは私たちもお救ひをうける時が来るであらう。』

『え、私ももう泣くことは止めます。あなた、どうかせつせと働いて下さい。私も』

骨を折つてはたります。さうして私の犯した罪のつぐのひをいたしませう。』

『ああ、左様しよう。お前と二人で苦しむのなら、どんなに苦しんでも私はかまはないよ。』

アダムは、そのあたりの木のかげに、小さな掘立小舎をつくりました。さうして木のはしくれで土をほり、石くれをすて、そこに草を植ゑて畑をつくりました。食べられる草と食べられぬ草とを見わけることは、エデンにゐた時から、よく、アダムは知つてゐました。こゝには、雑草ばかり多くて、おいしい草や、果のなる木は少くありませんでしたが、氣をつけて雑草をとり除きさへすれば、菜や穀物も出来、果物も生るのでありました。

『ごらん、神様は私たちの骨折に報いて下さつたよ。こんなによく畑の物ができた。』とアダムはよろこびました。

『ほんたうにねえ、それに、自分で骨を折つてこしらへたものをたべるのは、餘計に』

おいしい様な気がしますわねえ。』

と、エバもよろこびました。

二人は悲しいなかにも、わづかな慰めを得、さびしい中にも、いくらかの満足を得ることができて、だんぐ此の世の生活に慣れてきました。

三、カインの誕生

そのうちに、二人にとつて、とても／＼よろこばしいことができました。それは赤ン坊が生れたことです。エバは妊娠して、男の子を生ましました。それはするぶん苦しい目にあひましたけれども、赤ン坊が出来て見ると、その苦しさも消えたやうに忘られるのでありました。小さい人、可愛らしい人、はじめてこの世に生れた赤ン坊をだいて、アダムとエバも、狂気のやうになつてよろこびました。

『まあ、するぶん小さいわねえ。』

『本當に小さいものだな。これが大人になるのだらうか。』

『口もきけないし、耳もきこえないのだから。何だか蟲みたいだわねえ。』

二人は珍らしがつて、耳をひつぱつたり、鼻をつまんだりしました。さうすると、

赤ン坊はおぎやあ／＼とやかましく泣きたてました。

『まあ、するぶん大きな聲だこと。』

『ほんたうにやかましい子だ。からだには似合はない大きな聲だ。』

『神様のお助けで、こんな可愛い子を生ますることができましたから、カイン(助け)といふ名をつけませうよ。』

『うむ、それはよい思ひつきだ。さうしよう。』

二人はその赤ン坊にカインといふ名をつけて、蝶よ花よと可愛がつて育てました。

四、アベルの誕生

そのうちに、目出たいことがまたつゞきました。エバには、二人目の赤ん坊が生まれ、エバはその子にアベルといふ名をつけました。

けれども、アダムとエバのよろこびは長くつゞきませんでした。無邪氣な、可愛らしい兄弟のおそびに見とれて、我を忘れて楽しんでゐたのは、ほんの少しの間でありました。それは、子供たちが、だんく物心つくにつれ、兄弟喧嘩をするやうになつたからです。とりわけ兄のカインは、ふしぎにも性質があらあらしく、何ぞといへば喧嘩をしがりました。無邪氣な愛らしさは、いつのまにか失くなつて、おそろしい目でアベルをにらみつけたり、親の目をぬすんで弟をいぢめたりすることがたび／＼でありました。

『ああ、どういふわけであんな子が生れたらう。私たちは何ひとつ喧嘩などといふことはしたこともないし、あら／＼しい言葉などをつかつたこともないのに、カインは誰に似てあんなに荒つばいのだらう。』

とアダムは嘆きました。

『ほんたうにどうしたといふことでせう。せつかく子供が出来てよろこんでゐれば、またこんな心配をしなければならぬ。ああ、これも皆、私が神様にそむいて、悪魔の言ふことをきいた罰でせう。』

とエバはさめざめと泣きました。まったくカインの心には、あのおそろしい、憎らしいサタンの息がかゝつてゐるのであります。

五、アベル羊を牧ふ

カインとアベルは、だんく育つて、もう一人前の若者になりました。

カインは、お父さまのまねをして、土を耕すことをはじめました。けれども人間の生活に必要なものは、植物ばかりではありませんでした。着物をこしらへるためには獣の毛が要りました。そこで、アベルは、羊をかふことを考へつきました。野にす

んでゐた羊をつかまへて馴らし、それを飼つて見ますと、よく人間に馴れ、ずん／＼蕃殖してゆきますので、アベルは面白がつて、しきりに羊飼ひに熱心になりました。

いちわるものカインは、すること爲すことアベルに反対しました。

「何だ、お前はちつとも農業をしないで、そんな獣いちりばかりしてゐる。なまけ者め。これからお前にはもう、畑で出来たものは一切食はせないから左様思へ。」

「まあまあ、こんな荒つばいことをいふものではない。」

とお父さまはカインをなだめました。

「羊だつて人間に必要なものだ。羊ばかりではない。人間に必要なものが、まだまだ澤山あるにちがひない。私は土を耕すことをはじめたけれども、土を耕すことが人間の生活の一切ではあるまい。まだ／＼外にいろ／＼必要な仕事があるであらう。私はアベルが、あの野山に走つてゐる羊を飼ひならすことを始めたのを、まことによい事だと思つてゐる。これからさき、われ／＼はまだいろ／＼な事をしなくてはならぬ」

いのだ。われわれはもつとよい生活の仕方、もつとよい仕事を、研究しなくてはならないのだ。お前みたいに一概に悪くいつてしまふものではない。」

お父様にやりこめられて、カインはますます不平でした。お父様のおつしやつたことはカインの耳には、たいへん悪く聞こえました。何だか、アベルの方が、カインよりはよつぽど伶俐だといふやうに聞こえたのです。

「何だ、お父様はアベルのひいきばかりしてゐる。今に見ろ。」

カインはぶつ／＼おこりながら、道具をはうりながら、どこへかゆきました。

六、二人の供へもの

お父様のアダムは自分が神様に背いた罪を後悔するにつけ、神様が、自分の仕事を祝福して下さるお恵みをありがたく思ひました。で、自分の畑の一角に石でもつて祭壇をきづき、畑でとれたもののお初穂を、まづ神様にささげることにしてゐました。

ある日のこと、カインは、自分の畑でできた木の果をもつて来て、祭壇に供へました。カインは、別に神様がありがたいとも何とも思つてゐなかつたのでした。たゞお父様がなさるから、自分も仕ようと思つただけでありました。で、無雑作に木の果を祭壇の上にはうり上げて、おいのりもせずにおきました。

神様は、どうして、そんな供物をおうけになりませう。

神様が、供物をおうけになつたしるしには、天から火がふつてきて、その供物をやきつくすのでありました。お父様のアダムが、供物をなさる時、神様はきつと、火をふらして、それを焼いてしまひなさいました。けれども今日カインの捧げた供物の上には、いつまでたつても火が降りませんでした。

カインは、ふしぎに思ひました。

『どうしたのだらう。まだ火が降つて来ない。今日にかぎつてどうしたのだらう。早く降つて来い。早く降つて来い。』

カインが、左様いつてゐる時、畑のむかうにあらはれたのはアベルでありました。その手には、小さな、生れたての子羊をもつてゐました。

『アベルか、何に來たのだ。』

『供物をしにきたのですよ。』

『その羊の子を供へるのか。』

『え、これは、今日、一疋の牝羊が初めて生んだ子なのです。私は初めて生れた子羊を神様にさしあげることにしてゐるのです。』

『だめだよ、お前だめだ。』

と、カインは止めました。

『今日はだめだよ、僕も供物をしたんだけど、火が降つて来ないのだ。今日は神様がお留守なんだ。』

『左様ですか、それでもいいですよ。神様はどこかにいらしつて、私たちの祈りをき

いて下さるでせう。どこからだつて、私たちの祈りのきこえない所はないでせう。』
アベルはさういつて、祭壇の前にすすみました。さうして、子羊をその上に供へ、そこにひざまづいて、お祈りをしました。

『神様、私の羊の一疋に、はじめて子を生ませて下さいまして、まことにありがとうございます。』
『神様、この初子を、お禮のしるしに捧げまするゆゑ、どうぞお納め下さいませ。』
神様、どうか私の羊たちを祝福し、尙この上ともたくさん子を生ませて下さいませ。』
その祈りが終つた時、たちまち天から火がふつてきて、アベルの供へた子羊をすっかり焼いて了ひました。が、カインの供へた物には、火のあとありませんでした。

それを見たカインは、ぶん／＼と怒り出しました。

『なんだ、神様はアベルの供物ばかりをうけいれて、僕の供物にはかまつて下さらないのだ。人をばかにしてゐる。』

さう口の中で、つぶやきながら、頬をまつかにふくらまして、カインは下をむいて立つてゐました。

その時、神様のおごそかな御聲が、雲の中からきこえました。

『お前は何を怒つてゐるのだ。何故下をむいてつぶやいてゐるのだ。お前がもし、善い事をしてゐるのなら、うけいられる筈ではないか。若し善い事をしないのなら、罪はお前の門口に伏してゐるのだ。そしてお前にとびかかつて、お前をころすのだ。お前は何も、アベルのことを嫉むには及ばぬ、お前が兄らしい行ひをしてさへゐれば、アベルはお前に従ひ、お前はアベルを治めることができる筈である。』

七、カイン弟を殺す

カインはだまつてゐました。神様のお言葉も、ねちけ曲つたカインの心をうごかすことができなかったのです。

しばらくたつて後、カインは、アベルにむかひ、

『野原へ行かう。』

といひました。

『ああ、行きませう。』

と、アベルは兄のあとにつゞきました。アベルは自分が野原においてきた羊の群のこ
とをすてておくことができませんでした。

野原へゆくと、そこには、たくさん羊が主人のかへつてくるのをまつて、木の
けに集まつてゐました。

『お、待つてゐたかい。待つてゐたかい。』

アベルは、やさしい愛のひとみをなげかけて羊に近づきました。美しい、やはらかな毛をたくさんもつた羊は、もう何十疋といふほどの数で、それ／＼小さい羊をつれてゐました。それを見ると、カインのねたみ心は一層かきたてられました。

おそろしい悪魔の心は、一時にカインの胸に頭をもたげました。カインはいきなり手にもつた棒でもつて、アベルの頭をなぐりつけました。不意に急所をうたれたアベルは一とたまりもなく、うんといつたまゝ、地に倒れました。可哀さうに、罪のない、正しい、愛らしい弟は、兇暴な兄の手にうち殺されてしまつたのです。

血は滾々と流れて青草を染め、乾いた土にしみ入りました。赤い夕日が、アベルの死顔を照らしました。

それを見たカインは、はつとおどろきました。カインは、憎らしい、いまましいがいつばいで、たゞ無茶苦茶に、アベルをなぐりつけたのです。けれども、その結果が、怖ろしい死にならうとは思ひませんでした。今、目の前に、獣のやうに殺され、血の氣がなくなつて、齒をくひしばつて、鼻から、口から、どす黒い血をふきだしてよこたはつてゐる弟を見た時に、カインの頭はくらく／＼と目まひがして來ました。さうして、自分の罪がどのやうに重いかといふことを、はつきりと知りました。

カインは、目をおほうて、後をも見ずに、其場をにげだしました。

八、カインの追放

しばらくにげてゆくうち、おそろしい聲が雲の中からひびきました。

『カイン、お前の弟のアベルはどこに居るか。』

カインは、はつと雷にうたれたやうに、立ちすくみました。けれども、それと同じ時に、また心の中にひそんでゐる、横着な癖がむく／＼と頭をもたげました。

『私は知りませんよ。私は弟の番人ではありません。』

さう、しらばつくて答へました。

おそろしい、雲の中の聲は、またひびきました。

『お前は何をしたのだ。お前の弟の血が、土の中から私にむかつて叫んでゐるぞ。』

お前は詛はれて此の地を離れなければならぬ。此の地は口をひらいてお前の弟の血

を、お前から受けたのである。お前は地を耕しても、地はもうお前のいふことをきかぬぞ。お前は曠野に漂泊ふ子となるがよい。』

さすがのカインも、もはや逃げも隠れも出来ぬことをさとりました。しづかに頭を垂れ、目をとちて、いひました。

『まことに恐れ入りました。自分の心のあら／＼しいために、とんだことを致しました。私の罪は大きくして、私には負ふことができません。今日、あなたが私をこの土地より追ひ出します上は、もはや神様のお聲をきくことの出来ぬ身となり、ひろい世界にあてどもなく彷徨ふ、さまよひの兒となることでありませう。地の上にするのである者は、みな私を憎んで私を殺すことでありませう。』

しをれきつて、泣いてゐるカインの姿をごらんになつた神様は、

『いや、左様でない、だれでもカインを殺すものは、七倍の罰をうけるであらう。お前の殺されることのないやうに、お前の顔に印をしてやらう。』

とおつしやつて、カインが、人にころされぬための、特別の印をおつけになりました。

カインは、しほくとしてすみなれた故郷をにげだしました。

アベルの思ひがけない死、カインの逃亡……降つてわいたやうなこの災難に、アダムとエバは氣も顛倒するばかりにおどろきました。殊に氣のよわいエバは、どのやうになげきかなしんだことでありませう。後に三番目の子のセツが生れるまでは、エバは少しのなぐさめもありませんでした。毎日々々、泣き沈んで居りました。

第九章 カインとその裔

一、カイン、ノドに住む

エデンの園に比べれば、アダムの住んでゐたところは、曠野のやうなものでありませんでした。けれども、カインの追はれた曠野にくらべれば、そこはまた、樂園のやうでありました。カインのいつたところは見わたすかぎりの瘠地で、どこを見ても食べられるやうな果實などは一つも見あたりませんでした。カインは、自分の犯した罪に責められ、悔いと悲みに心を噛まれつつ、さびしい荒野をさすらうてあるきました。

さうしてあるいてゐるうちに、カインも次第に荒野の生活になれてきました。かた

い、石くれだらけの荒地も、どうにかかうにか耕すことができ、わづかながら收穫物を出すやうになりました。やがてカインは、ノドといふところに住居をさだめました。

二、はじめて出来た人間の社會

神様は、カインの孤獨をあはれんで、妻をおあたへになりました。カインの妻はたくさんの子どもを生みました。子どもたちはみなカインから農業をならひました。さうして地の上には、だんぐ人間がふえました。農業の仕方も次第に進歩すると共に、生活の仕方が萬事かはつてきました。人々はみなカインにならつて、家をつくり、そこにはじめての村ができました。カインは、わるい野の獸の入つてくるのをふせぐために、石をきつて、村のまはりをかこみました。それがはじめて地の上にできた城壁でありました。この小さい村は、カインの總領息子エノクの名をとつて、エノクの村と名づけられました。エノクは、お父さまについで、その村の村長になつたので

す。かうしてはじめて人間の社會ができました。

三、亂暴な壓制者レメク

エノクの村はますます榮えてゆきました。人間はますますふえ、家は次第にたちならび、畑も一層ひろくなりました。エノクのとおり息子はイラデといひ、イラデの子にはメホヤエルが生れ、メホヤエルの子にはメトサエル、さうしてメトサエルの總領息子にレメクが生れました。

レメクは大さうかしこく、つよい人でありました。けれどもその心はカインの惡をうけついでをりました。レメクは、アダ(光)とチラ(陰)といふ二人の妻をめぐりました。神様は、はじめから一人の男と、一人の女を夫婦としておつくりになりましたが、レメクはそのはじめからのしきたりに背いて、二人の妻をもつたのであります。レメクはまた、至つて亂暴もので、自分の思つたことは、理が非でも押し通さね

ば承知しませんでした。村の人たちは、レメクの前には、まるで奴隷とおなじやうで
 ありました。もしも、レメクの命令に對して、何とか反對をでも唱へやうものなら、
 レメクはもつて生れた大力でもつて遠慮會釋もなく打ちのめしました。

アダの子にはヤバルが生れました。ヤバルは羊を畜ふことをはじめましたが、大さ
 うそれが上手で、ヤバルの羊だけは、外の家の羊の三倍も五倍もふえました。それと
 いふのはヤバルは牧草のゆたかな野原をさがしまはり、氣をつけて羊をやしなつたか
 らです。ヤバルの羊は、いつも肥つてをり、毛並もうつくしくありました。さうする
 うちに、ヤバルはこんなことを考へだしました。

『羊を畜ふには、一つところに住んでゐてはだめだ。よい牧草をさがさうと思へば、
 始終牧場をかへなければならぬ。それには、きまつたところに家をもつてゐては、
 思ふやうに動くことができない。いくらよい牧草があるからといつても、毎日十里も
 二十里も行つたり來たりは出來ない。それには、どこへでも持つて歩けるやうな家を

つくることが一番だ。』

さう考へたヤバルは、いろ／＼と工夫してとうとう、動く家をかんがへだしまし
 た。それは何かといへばテントなのです。その頃のことですから、多分羊の皮でもつ
 づり合せてつくつたものでありませう、木の柱を組立て幕を張つて、テントをつくつ
 たのを見て、お父さんのレメクは、

『それは一體何だ。』

とききました。

『これは動く家ですよ。これをもつて歩いて、どこでも牧草のたくさんあるところへ
 たてるのです。牧草がなくなつたら、また外へ持つて行つて、そこへ家をたてるので
 す。』

とヤバルは答へました。

『うむ、それはよい思ひ付きだ。なるほどお前は羊飼ひの天才だな。よし、やつて見

るがよい。』

そのあくる日から、ヤバルはたくさん羊をひきつれてどこへか出かけました。さうして、いく日たつても、いく日たつても歸つて来ませんでした。半年ほどたつて、ヤバルが歸つてきた時、その羊が數へきれぬほどたくさんにふえてゐるのを見て、村の人たちはおどろいてしまひました。

『なんとおどろいたものだ。私もヤバルの眞似をしよう。』

と、ヤバルの眞似をして、テントに住むものがたくさんできました。

それから後、人間の世界が、ずつとひろくなりました。それまで、人々は、たゞエノクの村にばかりすんでゐたのですが、それからはエノクの村をはなれて、百里も二百里もとほくへテントの家をもつてあるく人が多くなりました。さうして行つた先々で、また別な村をたてる人もありました。さういふ風にして、あちこちに人間がちらばつてゆきました。

ヤバルの弟はユバルといふ名でありました。ユバルは、生れつき歌をうたふことが上手でありました。野の鳥の聲も、小川のせゝらぎも、ユバルの口に入つて、おもしろい歌となりました。ユバルはまた、木の枝に糸をかけて琴をつくり、羊の角に穴をあけて笛をつくりなどして、おもしろい音楽を奏しました。それまで、そんなことをした人も、さいた人もありませんでしたから、人々はたいさうよろこびました。ユバルの家のまへには、ユバルの音楽をきくために、毎日村の人々がおしあふやうにして集まりました。

四、武器の發明

チラはトバルカインといふ子を生みました。トバルカインは、生れつきたいさう細工のすきな子でありましたが、これまで人間が木や石でもつて、不完全な道具をこし

らへて、お百姓をしたり、狩獵をしたりしてゐるのを、いかにも不便なことだと思ひました。

『もつともつと硬くて、もつともつと自由に形をかへられる、便利なものがありさうなものだ。おれはひとつ、それをさがしだしてやらう。』

トバルカインは、さういつて、川の底や、山の中の石くれをさがしまはりました。さうして、強い火の中でこれを鍛かして、それから鐵や銅を見つけたし、それをもつて刀や矢や、槍などをつくることをはじめました。

あたらしい武器の發明は、人間を一層あらつぽくしました。あらあらしいお父様のレメクは、さつそくその武器をつかつて、一人の少年をころしてしまひました。さうして、こんな歌をつくりました。

アダとチラよ、私の言葉をきけ、

レメクの妻たちよ、私の言葉をいれよ、

私は私のいたでをうけたために人を殺す、

私の傷のために少年をころすのだ、

カインのために七倍の罰があれば、

レメクを傷けた奴は七十七倍にして返してやるのだ。

なんとおそろしい歌ではありませんか。

さういふ風にして、カインの子孫は、たいさう榮え、殖えましたがれども、しかしだんだん神様から遠ざかり、墮落し、不安の空氣にみちてゐました。弟殺しのカインの血は、どこまでもその子孫につたはつてゆきました。

第十章 セツとその裔

一、親孝行なセツ

アベルを殺され、カインに逃げられたアダムとエバにとつて、セツの生れたことはくらべるものもないほど大きな慰めでありました。

『ああ、神様はやうやく私に慰めを與へて下さつた。カインの殺したアベルの代りに、この赤ん坊をさづけて下さつたのだから、この子をセツ（代り）と名づけよう。』

とアダムはいひました。その時、アダムの年は百三十歳でありました。長い間、愁ひに沈みきつてゐたアダムとエバの家には、また笑ひ聲がもれるやうになりました。お父さん、お母さんのよろこびに背かず、セツはたいさうよい子でありました。ま

つたくアベルの生れ代りにちがひないと思はれるほど、やさしく、親孝行でありました。アダムとエバはますますよろこんで、大切にセツを育てました。

アダムとエバには、それから後たくさんの子どもが生れました。セツを生んで後、八百年もアダムは生きてゐました。さうして、數へきれないほどたくさんの子どもを生んで、九百三十歳でなくなりました。エバも、やがて夫のあとを追ふて土に入りました。そして、

『汝は塵なれば塵にかへるべし。』

といふ神様の仰せの通りになりました。かぎりない幸福をうけられる筈であつた。人類のはじめの祖先は、悪魔のいふことをきいて、神様に背いたばかりに、樂園を失つて、塵にかへつてしまつたのです。

二、神様をうやまつたエノス

セツは、百五歳の時に長男を生み、エノスといふ名をつけました。エノスも、お父様によく似て、美しい、なさけ深い人でありました。

それまで、人間は神様をよぶのに、特別な名をもちひず、たゞ「神」とだけとなへておりましたが、エノスの時に、はじめて神様をエホバ（正しくはヤーウエ）とよぶやうになりました。

エノスを生んだ後、セツはたくさんの子をもうけ、九百十二歳でなくなりました。大昔の人は、くらし方が自然で、無理なことをしたり、わるいことに頭をつからしたりしませんでしたから、そのやうに長生きなのでありました。

エノス九十歳の時、長男が生まれ、その名をカイナンとつけました。エノスは、九百五年の間生きて、幸福な生涯をおくりました。

カイナンは七十歳の時に長男をもうけ、マハラルレと名づけました。さうして九百

十歳でなくなりました。

マハラルレは六十五歳でヤレドを生み、そして八百九十五歳でなくなりました。

ヤレドは、百六十二歳の時、長男を生み、エノクと名づけました。さうして、九百六十二歳でなくなりました。

三、神と偕に歩んだエノク

エノクは、先祖のセツや、エノスよりも、一層ぐれた人でありました。エノクは、いつもいつも神様と一しよに歩んでおりました。神様の思召しを考へずには、何一つ行ひませんでした。神様もたいさう、エノクをおよろこびになつて、いろいろのことをエノクにお教へになりました。エノクは、天のこと地のこと、昔のこと、後のこと、いろいろのことを神様から学びました。ユダヤのいひつたへによると、エノクはもう、その頃に文字を發明し、算術や、天文学を發明したといはれてをります。

エノクは、そのやうに神様のお恵をゆたかにうけて居りましたけれども、エノクの目から見た世界は、まことになげかはしい有様でありました。カインの裔は、ますます墮落して、神様をうやまふものなどは一人もなく、不義不正が平気で行はれてゐました。カインの子孫と、セツの子孫とは、いつのまにか交際をはじめ、息子娘のやりとりをして、ほんたうに由緒正しいセツの子孫といふものは、数が少くなつてゐました。さうして、セツ家の美しい、よい習慣を守るものは少くて、どれもく、カインの家の悪いならばしにばかり染みてゆきました。こんなことでは、世の中はどうなつてゆくことかと、エノクは心配でたまりません。で、人々にむかつていつも不心得をいましめ、神様を怖れうやまふことをすすめました。

「視よ、神様は、その聖い千萬の天使を率ゐておいでになるぞ。それは凡ての人を審判き、神をうやまはぬものの愼みのない仕業と、神様に逆らつて語つた、おそれ多い言葉とを責め給ふためである。」

エノクは、さう人々に告げました。けれども、墮落した人々は、エノクの誠めに耳をかたむけませんでした。

エノクの最後は、實に奇妙でありました。エノクは死にませんでした。神様は、この美しい僕を、墓の中に滅びさせることをおよろこびにならなかつたのでした。エノクは、ある日のこと、とつせん神様にとらへられて、天にあげられてしまひました。まあ、何といふ幸福な終りであつたでせう。その時エノクは三百六十五歳でありました。

エノクは六十五歳の時に長男メトセラを生み、それから三百年の間、神様と共に歩んでその間にたくさんの男女を生みました。メトセラは百八十七歳の時レメクが生れ九百六十五歳でなくなりました。

レメクは百八十二歳の時長男を生み、その名をノアと名づけました。

『この子は、エホバの詛ひたまうた地の上で、私が働き、骨を折るのを慰めてくれるものだ。だからこの子をノア（慰め）と名づけよう。』
とレメクはいひました。レメクは七百七十七歳でなくなりました。

第十一章 大洪水（上）

一、ノアの傳道

ノアの總領息子はセムであります。二番目の子はハムといひました。三番目の子はヤベテでした。ノアは、三人の息子にそれぞれよい妻をもたせました。さうして家内むつまじく、仕事をはげみ、神様をうやまひ、幸福にくらしてゐました。けれども、まはりの人間たちのありさまを見ると、幸福なノアも、心をかき亂されずにはゐられませんでした。

『ああ、ああ、困つた世の中になつたものだ。人間同志、みんなにくみあひ、ねたみあひ、苦しめあひ、争ひあつて、地の上には少しの平和もなくなつてしまつた。だれ

もだれも、同じアダム様とエバ様の子孫、みんな兄弟同志なのに、この有様は何といふことだらう。このまゝにしてゐたならば、世界はどうなることだらう。』

と、ノアは嘆息しました。

『ほんたうに困つた世の中ですわねえ、お父さん。トバルカインが刃物を發明してから人間はよけいに喧嘩がすきになつたやうですよ。』

と、セムもいひました。

『この頃は槍だけで足りないで、刀だの、戦鎧だの、いろ／＼なものをこしらへては喧嘩をしてゐるやうだ。』

と、ハムもいひました。

『お父さま、少しあの人たちをいましてやつたらどうです。』

と、ヤベテもいひました。

『うむ、今までいくど注意をしてやつたか分らないのだが、そのたびに私は嘲られ、』

罵られて、まるで厄病神あつかひをされてきた。まあ、カイン家の人たちは、とても私のいふことをきくまいが、セツ家の人たちだけでも、私の心の底をうつたへたいものだ。ほんたうに、セツ家の人たちも、カイン家の人たちとつきあひ、結婚をするやうになつてから、すつかり墮落してしまつて、御先祖様の精神をうけついでゐるものは、まるでなくなつてしまつた。何といふ情ないことだらう。』

とノアはいつて、更に言葉をつよめていひました。

『ねえ、お前たち、よくお聞き。私の曾祖父様のエノク様は、神様と一しよにお歩みになつて、生きたまゝ、神様のところへ連れてゆかれてしまつたお方だ。そのお方のおつしやつた言葉を、私は祖父様からいつもきかされて、今でも耳にひびいてゐるが、神様は人間の罪を我慢の出来るだけは我慢なさるが、どうしても許すことが出来ぬやうになれば、おそろしい刑罰をお下しになるといふことだよ。左様して、末の日に、千萬人の天使をひきゐて、人間を罰するためにおいでなさるといふことだ。私は、今』

の世の中の有様を見ると、曾祖父様のおつしやつたその時が来たのではないかと思ふのだよ。ごらん、神様をうやまふものが一人でもゐるかい。愛の精神をもつたものゝ一人でもゐるかい。聖い生活をしてゐるものが一人でもゐるかい。強いものはるばり放題、悪いことはし放題、うそはつき放題、さうして神様をないがしろにしてゐるのが今の世の中ではないか。かういふ世の中を神様はお許しになるだらうか。』

『本當に困りますねえ。お父さん、聞かれないまでも、傳道をして見ようではありませんか。』

と、セムはいひました。

『うむ、お前が賛成なら、私もきつとやるよ。明日といはず、今日からすぐにはじめよう。神様の審判は、いつ来るか分らないのだ。』

ノアは、子どもたちと一しよに、手をわけて、知つてゐる人、知らぬ人の區別なく一人々々傳道をしてゐるきました。

けれども、だれ一人耳をかたむけるものがありませんでした。

『へッ、何ですつて。正義がどうしたんですつて。愛がどうしたんですつて。正義つてどんな形のものですな。愛つてどんな匂ひのするもんですな。私たちには、そんな上品なものはさっぱり分りませんや。喧嘩をすると神様がどうなさるつてね。神様つてどこに立つてゐらつしやるんです。どんな目があつてどんな鼻があるんです。見えないものを相手にして心配をしたつて始まりませんからね。何ですつて、審判がどうですつて。え？ エノク様が預言をしたつて？ あつはつはつは、あんなねぼけ爺さんの世迷言を本氣にしてかつぎまはるなんて、お前さんもよつほど苦勞性だね。餘計な心配をするより家へかへつてまあ晝寝でもしなさい。』

一人がいふと、外の者も口を合はせて、

『さうだ、さうだ、ねぼけ爺、かへれかへれ。』

『ぐづぐづしてゐるとた、き殺すぞ。』

『めんだう臭い、やつつけろ、やつつけろ。』

はては、つばをはきかけたり、石をなげつけたりするのでありました。

ノアは、そんな目にあひながらも、失望せずに、村から村と傳道をしてあるきました。けれども、たゞの一人も、悔改める人はありませんでした。

『ああ、ああ、何といふことだ。どうしたらよいのだ。』

ノアは、疲れはてて、家にかへつてきて、床の上に倒れて、泣いてしまいました。

二、怖ろしい神命

ノアが、失望して、床の上に倒れて泣いてゐる時、神様のお聲が、あきらかにノアの耳にひびきました。ノアは、はつとおどろいて床の上にひざまづきますと、神様はつぎのやうにおつしやいました。

『すべての人の終りがわが前に近づいた。世の中は、よこしまなことばかりになつて

しまった。見よ、我は、彼等を世界とともに滅ぼしつくしてしまふ。お前は松の木をもつて、方舟をつくれ。その方舟は長さ三百キュビット、ひろさ五十キュビット、高さ三十キュビットで、三階に造り、房をたくさんつくり、あかり窓をつけ、舟の内と外とに瀝青をぬるがよい。見よ、我洪水を起して、凡て息あり、肉のある者を滅ぼし盡す。地に居るものは皆死んでしまはねばならぬ。けれども汝に對しては私は契約を立てる。お前の子、妻、お前の子たちの妻とみんなこの方舟に入れ。それから又、凡ての生物を、牝牡二つづつ選びとつて方舟に入れよ。さうして、たくさんのお食物を集めて方舟に積み。』

さうおつしやると、神様は天にお上りになりました。

『ああ、とうとう其の時が来たのか。』

と、ノアは深く悲しみました。けれどももはや悲しんでも仕方ありません。神様の御命令にはそむくことができません。ノアは三人の子どもと、妻と、嫁とをよびよ

せて、いひました。

『お前たちよくお聞き。私のかね／＼心配してゐたことが、とう／＼やつてきた。今日神様は、私にむかつて、近く大洪水を起して地上のすべてのものを滅ぼすことをお告げになつた。悲しいことだが、どうも仕方がない。それについては、神様は、私にいひつけて、方舟をつくり、其中にお前たちと共に入つて、洪水の難をのがれるやうお示しになつた。今日から、その仕度にとりかゝらなければならぬ。もう畑を耕すこともいらない。お化粧をすることもいらない。大いそぎで方舟をつくらなければならぬ。』

ノアの言葉をきいた子どもたちは、さてはとおどろきました。お父様はほんたうにえらい人で、いつも神様と一しよに歩いてゐるやうな人ですから、よもやお父様のいふことにまちがひがあらうとは思はれません。

その日から、ノアと、その妻子たちは、山へいつて、木を伐り、せつせとはたらき

はじめました。さうしてその木をくみあはせて、藤蔓であみ、その上に瀝青をぬり大きな舟をつくりました。

ノアの家のものたちが、畑もつくらず、御飯をたべる暇も惜しい様にして、木を伐つてはたらいてゐるのを見て、外の人たちは怪しみました。

『ノアの家の奴どもは一體何をしてゐるのだい。此間ぢうは、しきりに世迷言をならべて、あちこちを歩いて居たが、この頃は夢中になつて木を伐つてゐるではないか。』
『なにがさて、あいつらは世の終りが来るとか、大洪水があるとかいつて、舟をこしらへてゐるのだとさ。』

『あつはははは、またそんな夢のやうなことをいつてゐるのか。さて／＼困つたものだな。』

『つまり精神病ですな。』

『まあ、きちがひだね。』

『ノアさん、大分御精が出ますな。』

『い、お天気ですが、大水はどこからやつてきますかな。』

などと、さん／＼に嘲つたり、ひやかしたりしました。

ノアは、そんなことには耳もかたむけず、一生懸命に舟をつくりました。それは、とても／＼大きな舟でした。日本の寸法にすれば長さが七十五間、幅十二間半、高さが七間半もあるのです。それは箱形の無格好な舟でまはり中に瀝青をぬりつけてありました。出来上つて見ると、一層きたなげな、無格好な舟でしたから、人々はますます笑ひました。

『何だい、あれは。おそろしく汚なげなものだな。家でもなし、舟でもなし、まるで判じものだな。』

けれども、ノアは、その舟を大へんよくできたと思ひました。出来上つた舟を見上

げて、ノアはほつと息をつきました。

『ああ、やつとのことで出来上つた。随分長い間かゝつたな。見かけは自分ながら餘りよいとは思はないが、丈夫なことは受合だぞ。どんな大洪水にあつても大丈夫だ。』

三、ノア、方舟に入る

方舟ができ上つたとき、神様はまた、ノアにあらはれて仰せになりました。

『お前も、お前の家族のものも、皆方舟に入れ。私はお前がこの世の中で、たゞ一人わが前に義しいのを見た故、お前を救ふのである。それから、凡ての潔い獣を牝牡二番づつ、潔くない獣を牝牡二番づつ、空の鳥を七番づつとつて舟に入れよ。七日の後自分は大雨をふらせて、あらゆるものを地の上から拭ひ去つてしまふ。』

ノアは、神様のおいひつけどほり、獸と鳥とをあつめて、方舟の中に入れました。それからまた、自分たちや、動物のたべものをたくさん集めて舟につみこみました。

それを見てゐる人たちは、相かはらず、ノアがきちがひじみたことをするといつて、笑つて居りました。

『さあ、さあ、みんな方舟に入らう。』

ノアは、妻や子や、嫁たちをせかしたてて方舟の中に入りました。鳥や獣は、それぞれ分けて、別々な房に入れました。それらの生物に、飼料を分け與へるだけでも大へんな仕事でありました。セム、ハム、ヤベテの三人は、舟の中をかけまはつて、せつせとはたらきました。

方舟の上に立つて、あたりを見まはしますと、そのあたりの野の景色は又となくうつくしく見えました。そこへに見える石でたゝんだ小家や、天幕からは、炊ぎをする煙がたちのぼりました。そのうつくしい世界も、やがてまもなく亡ぼされるのかと思ふと、ノアの目には、熱い涙がにじみだしました。ノアはもう一度神様にいのつて、人間のためにおゆるしを求めました。

第十二章 大洪水(下)

一、大洪水来る

大洪水はとうとうやつてきました。

それはノアが六百歳の年の二月の十七日でありました。

それはあたり前の雨ではありませんでした。大淵の源が皆やぶれ、天の戸が開けたのです。天の穹蒼の上にある水が、一どきに地の上にふりそそいだのです。何ともたとへやうのない、はげしい大雨。天から大瀧を注ぎ下すやうな雨が、だしぬけにふりだしました。

『これはどうしたことだ。』

『何といふひどい雨だ。』

人々はおどろきました。屋根はひとたまりもなくこはれてしまいました。テントは一どきに倒されてしまいました。

『やッ、これは大へんだ。』

『逃げろ、逃げろ。』

あはてふためいて、深い森の中や、山の洞穴にげこみました。さうして雨の止むのをまつてゐました。

けれども雨は止みませんでした。雨の勢は少しもおとろへませんでした。二日目も、三日目も、四日目も、五日目も、雨はおなじやうなはげしさを以て、間断なくふりつゞきました。川は溢れて、村々を押し流し、海は逆さに流れて陸をひたしました。森の木々も押し流され、山の洞穴にも水が一ぱいになりました。

『本當だ。ノアのいつたとほりだ。世の終りがきたのだ。』

と、人々は今更のやうにおどろきました。

『ノアはどこへ行つた。』

『方舟はどこだ。』

『方舟へにげよう。』

『方舟へにげよう。』

と、みんな山の上にかけて上つて、ノアの舟のありかをさがしました。その時、ノアの方舟は、はるかむかうの水の上に、ゆらりと揺られて浮かんでゐました。乗らうとしても、乗るすべはありません。

『おーイ、ノアさーん。』

『助けてくれー、助けてくれー。』

と叫んでも、その聲は、はげしい雨のひびきに打ち消されて、聞こえやう筈はありませんでした。その中に、水はおそろしい勢ひで、森を呑み、山を呑み、泣き叫んで

にげまどふ人々を、片つばしから呑んでしまひました。

二、方舟アララテ山に止まる

おそろしい大雨は、四十日四十夜の間、ふりつゞきました。世界中の陸地は、すっかり水の下になつてしまつて、どんな高い山の頂も見えなくなりました。人も、獣も、鳥も、蟲も、一つ残らず死んでしまひました。たゞノアの方舟だけが、その洪水の上に、ゆらりゆらりと流れてゐました。

四十日の後、神様は、ノアと、その子たちと、凡て方舟の中にある生物のことを思ひ出しなさいました。さうして、大淵の源と、天の戸を閉ぢふさぎ、地の上に風を吹かせなさいました。風が吹くとともに、水は次第に減つて、七月の十七日に、いままでゆらゆらと、どこともなく流れてゐた方舟は、かたい地の上に底をつけました。その山は、アララテ山でありました。アララテ山といふのは、パビロニヤの北の方に

あるアルメニアといふ國の高山のひとつであります。

『おう、舟が地べたにくつついたやうだぞ。ありがたいな。ありがたいな。』

ノアは大よろこびで、窓をあけて外を見ました。けれども、舟は底を地へつけたただけで、まだ地面は少しも見えませんでした。どこを見ても、どこを見ても、たゞ一面の水でありました。

『まだく、なかくだ。』

ノアは窓をしめて、中へひっこみしました。

三、鴉と 鳩

方舟にはいつてから、もう半年あまりもたちました。長いく、陰気なく生活、まつくらな舟の中で、恐れと不安にみちた生活、ノアやその子たちは、どんなにさびしくくらしただせう。見るものといつては、どこまでいつてもく限りのない水

ばかり、土の形といつては、一寸も一分も見ることができないのです。

今日こそは地が見えるだらう、今日こそは見えるだらう、と、毎日々々、みんなは窓をあけて外を見ました。けれども、中々地面は見えませんでした。

『早く退け、早く退け。』

みんなは、もどかしがつて、口々にさう叫びました。

方舟が、アララテ山に止まつてから、二月半もたつて、十月の一日に、やつこのこと、あちこちの山のてつべんが、水の上にはあらはれました。

『やあ、地面が見える。』

『やあ、山が見えるぞ。』

みんなは、をどりまはつて、よろこびました。

それから四十日たつて後、ノアは、

『もう、よつほど水がひいたかしらん。ためしに鳥をとばして見よう。』

と、鴉をとらへて、窓から放して見ました。鴉は大よろこびで、さつと羽ばたきしてとびだしました。しかし、長い間せまい房にとちこめられてゐたことですから、羽が自由にうごきませんので、そんなに高くのぼることができません。ひらひらととび下りてきては地べたにとまりました。しかし地べたにはまだ水があつて、足も羽もびしよぬれになつてしまひました。それでも地面が珍らしいので、あつちへいつたり、こつちへいつたり、ぬれた地の上をあるきまはつてゐました。

『今度は鴿を放して見ませうか。』

と、セムはいひました。

『ウム、鴿を放してごらん。』

と、ノアは答へました。

ヤムは、可愛らしい鴿をかゝへてきて、窓からパツと放しました。久しぶりで外に

出た鴿は大よろこびでばつと飛び上り、やがて地の上に舞ひ下りましたが、どこも水だらけで、とまる場所がないので、しばらくすると、また舟にもどつてきました。

『とまる場所がなくて、いやなのだよ。お、よく歸つて来た。』

ノアは鴿をだいて、舟の中に入れました。鴿は、夕方になつても、歸つてきませんでした。

それから七日たつて、ノアはまた、鴿を放して見ました。鴿は、今度は大分羽がつよくなつたと見えて、飛びだすと、えらい勢ひで空にまひ上り、たちまち見えなくなつてしまひました。

『おや、どこへ行つたのだらう。』

みんなは、窓のそばにたつて、鴿のかへるのをまつてゐましたが、いつまでたつても鴿はかへつて来ませんでした。

夕方になつて、ノアは、窓によつてあちこちを見まはしてゐますと、たちまち、はたはたと羽音がして、鴿がかへつてきました。

『お、鴿が歸つてきた。』

ノアは大よろこびで、手をさしのべますと、鴿はすぐにノアの手にとまりました。ひよつと見ると、その口に何か青いものをくはへてゐました。

『おーい、鴿がかへつてきたよ。何かもつてきたよ。』

とノアのいふのをきいて、妻も子どもたちも、みなかけ集まりました。

『ほんとに、何かくはへてゐる。何だらう。』

『ああ、木の葉だ。』

『木の葉だよ。木の葉だ。』

『何の葉だらう、これは。』

もう、幾月の間も見なかったこともない、木の葉を物珍らしげにとりまいて、人々は見て

のました。

『お、これは橄欖の芽だよ。』

『ほんたうに橄欖の芽だ。』

『もう、木が生えだしたのだ。』

『うれしいな、うれしいな。』

『新しい世界がはじまるのだ。』

『いつになつたら舟を出られるだらう。』

『待ちどほしいな。』

と、みんな舟を出られる日を、指折りかぞへてまぢました。

それから七日目の朝、ノアはまた鴿を放して見ました。その日には、鴿はとうくかへつて来ませんでした。

『お父さん、鴿はかへりましたか。』

『いや、歸つて来ないよ。もう地の上に水がなくなつたから、歸つて来ないのだらう。』

『さうでせうね。よつほど水がひいたのでせうね。』

『うむ、そのうちには方舟から出られるだらう。』

と、ノアは答へました。

第十三章 新らしい世界

一、ノア、方舟を出づ

やがてその年は暮れて、あたらしい年がきました。ノアは六百一歳になりました。そのお元日には、地の上からは、ほとんど水がなくなりました。けれども、まだすっかりかはいたのではなく、どこもかしこも泥沼のやうになつて見えました。

その中にだんく土がかはいて、固まりました。

『早く土の上を下りませう。』

『もう舟を出てもよいでせう。』

ノアの息子たちは、まちどほしがつて、催促をしました。しかしノアは、

『まあまあ、もう少し待ちなさい。すつかり固まつてしまふまではあぶないから。』

と言つて止めました。息子たちは、

『ああ、早く出たい。早く出たい。』

と、口ぐせのやうにいひました。

そのうちに一月の二十七日になりました。思ひかへせば、去年の今日、おそろしい大洪水は地の上におこつたのです。その日からまる一年の間、ノアたちは、せまい、うすぐらい方舟の中で、陰氣な、さびしい生活をしました。ほんたうに、長い、長い、退屈な、退屈な生活でありました。みんなは、その一年間のことを思ひかへして、今更のやうに、恐ろしいとも、悲しいとも、うれしいとも、言ひ様のない感じに、からだをふるはせました。

その日、神様はノアにむかひ、仰せになりました。

『お前と、お前の妻と、お前の子と、お前の嫁と、みな方舟から出よ。お前と共にゐ

る凡ての生物、鳥も獸も昆蟲も、すべていつしよに連れて出なさい。さうして地の上に生み、また殖えなさい。』

『はッ、はッ、ありがたうございます。』

ノアはとびたつて息子たちをよびあつめました。

『さあ、もう方舟から出てもよいぞ。皆舟から出いと神様が仰せになるぞ。』

『ありがたい、ありがたい。もう出てもいいんだとさ。さあ、皆出よう、皆出よう。』

『お前たち、皆、手をわけて、鳥や獸や昆蟲を舟から出してやりなさい。』

セムとハムとヤベテとは、順々に生物をつれだして、舟の外にだしました。一年の長い間、くらい房にとちこめられてゐた鳥や、獸たちは、にはかに舟の外に出されて、うれしさをどりまはり、はねまはり、狂氣のやうにとんであるきました。ノアと、その妻と、子と、嫁たちは、久しぶりで地べたをふみました。

『ああ、一年ぶりで踏む土だ。』

皆は、物めづらしく、なつかしく、かたい地べたをふみしました。さうすると、からだ中に、ふしぎな力がわきおこるのでありました。

二、新らしい契約

地の上には、何一つ生きてのこつてゐるものはありませんでした。見わたすかぎりそこは新らしい世界でありました。

『ああ、怖ろしい災害であつた。あのたくさんの人々、あの盛んな村々、あれがすっかり亡びてなくなつてしまつたとは、まるで夢のやうな気がする。ほんたうにエノク様の預言が、すつかりあたつたのだ。それにつけても、あの怖ろしい大洪水の難をのがれて、新らしい世界に生きのこつたわれ／＼は何といふ幸福なものだらう。神様のお恵みは、どれほど大きいか、はかることはできない。さあ、息子たち、何よりも先きに、神様に燔祭をささげて、お禮を申上げなければならぬぞ。』

『さうださうだ、さあ、みんなして祭壇をきづかう。』

セムは、ハムとヤベテと、めい／＼の妻たちをさしづして、石をひろひあつめ、それを積みかさねて、神様に犠牲をささげるための、祭壇をきづきました。さうして、潔い獣と、潔い鳥をとつて、その上に焼き、神様にささげました。犠牲の烟は、空たかくたちのぼつて、神様の前にとゞきました。ノアと、その妻とその息子たち、嫁たちは、その地のの上にひざまづき、神様を拜し、

『神様、おそろしい災禍の中から私たちをお助け下さいまして、まことにありがたうございます。』

とお禮を申上げました。

神様は犠牲のかうばしい香をおかぎになつて、心の中に、

『自分はふたたび人間のために地を呪ふことをすまい。凡ての生物をうち滅ぼすことをすまい。地のあらん限り、播種時、收穫時、寒い冬、熱い夏、日と夜とがつゞくや

うにしよう。』

とおつしやいました。さうして、ノアとその息子たちにむかひ、おつしやるには、
『生めよ、殖えよ、地に満てよ。地の凡ての獣、空の凡ての鳥、地に這ふ凡ての物、海の凡ての魚、みんなお前たちを恐れ、お前たちの前におのゝくであらう。これらのものは皆お前たちに與へられる。凡ての生きてゐるものは、お前たちの食物としてよろしい。菜蔬と同じやうにお前たちに與へる。けれどもその肉を、その生命なる血とともにたべてはいけない。生きたまゝで食べてはいけない。』

お前たちは殺してはならぬ、人を殺したものは、人でも獣でも必ず之を討すであらう。凡そ兄弟たる人の生命を取つたものは、必ず之を罰する。人の血を流したものは必ずその血を流させられる。人は神の像のごとく、つくられたものであるから、殺してはならぬ。

汝等生めよ、殖えよ、地に饒くなつてこの中に殖えよ。

見よ、我汝等と、汝等の後の子孫、汝等とともに居る諸々の生物、鳥、家畜、および地のもろくの獸と契約を立てる。凡て方舟から出た諸々の獸たちとまで約束する。凡て肉をもつてゐるものは、これから後、洪水のために亡ぼされることはない。地を滅ぼす洪水は、これから後、決して起らぬであらう。我が汝等、および汝等と共にゐる生物との間に、世々限りなく立てる契約は之である。我は、わが虹を雲の間に起す。この虹が、汝等と我との契約のしるしである。我雲を地の上に起す時には、その中に虹を起す。この虹の出た時、我と汝等および凡ての生物との間に約束をしたことを思ひ出して、再び地の上の、凡ての肉をもつてゐる者を亡ぼす様な洪水を起すまい。虹が雲間にある時、我はお前たちとの契約を思ひ出すのである。」

神様が、さう仰せになつた時、「あッ」と一人の嫁が叫びましたので、人々は何かと思つて、その嫁の指さす方を見ました。そこには、むかうの空たかく、うつくしいとも、けだかいとも、いひ様のない、七色の虹の橋が、地の一方から、天の一方へかけ

て、立つてゐました。

「あッ、あれが虹だ。あれが神様のお約束のしるしだ。」

ノアと、その子たちは、うつくしい虹を仰ぎ、感謝の念にくれて、うつとりとながめ入りました。

神様をないがしろにして、勝手氣まゝなことをしてゐると、思ひがけない日に、神様の日が來ます。新約聖書マタイ傳に、

「その日その時を知る者なし、天の使たちも知らず、子も知らず、たゞ父のみ知りたまふ。ノアの時のごとく、人の子の來るも亦然あるべし。曾て洪水の前、ノア方舟に入る日まで、人々食ひ飲み、娶り、嫁がせなどし、洪水の來りて盡く滅ぼすまでは知らざりき。人の子の來るも亦然あるべし。」

とある、キリストの御言葉をふかく味ひませう。

第十四章 ノアとその子

一、ノアの農業

そこはアルメニアの山地でありました。一年にわたる大洪水のために、山々の木々はみなおし流されてしまつて、どこもかしこもはげ山でありましたが、そのあとにはもう、あちこちに、小さな草木が芽をだしてをりました。洪水前の世界にくらべるとあれはてた、さびしい世界でありましたが、ノアの一家は、そのさびしい世界に生きて、あたらしい人間の社會をこしらへなければならぬのでありました。

さいはひに、神様の祝福は、新しい世界にゆたかに注がれました。日はあたたかに地をてらし、風も雨も時を得て、草木はすんすんと育ちました。はげ山もいつしか

緑の毛氈におほはれ、あれ野にはうつくしい草花がさきだしました。

ノアと、その子たちは、野はらへ出て行つて、たべものをさがさなければなりません。さいはひに、たべものは豊かにありました。食べられる野菜は、そこにもこゝにもたくさん生えだしました。ノアは、もつと農夫で、畑をつくることは大さう上手でありましたから、それらの野菜や、穀物の種子を大切に採集して、畑をつくることをはじめました。あくる年の収穫時には、たくさん穀物がとれました。

セムやハムは、方舟からひきだした牛や羊の世話にいそがしくありました。ゆたかな牧草と、よい氣候とのために、牛や羊はすんすんとふえました。ノアの天幕のまはりには牛と羊の大群がありました。

さうして、さびしい世界はだん／＼にぎやかになりました。セムと、ハムと、ヤベテの妻にはそれ／＼子供が生まれました。あつちの天幕にも、こつちの天幕にも、子供たちの笑ひごゑがたのしくきこえるやうになつて、世界はますます／＼にぎやかになつ

てゆきます。

二、ノア葡萄を植う

あるとき、ノアは山の中をあるいてゐました。道ばたの草むらに、濃い紫色をして、まるい果實が、房のやうにあつまりあつて、ぶら下つてゐました。あまりうつくしいので、ノアは、そばへよつて見ました。さうして、鼻を近づけて、匂ひをかいで見ますと、たいさうよいにほひでした。あまいやうな、すっぱいやうな匂ひがして、ノアは思はずよだれをたらしました。

『ちよつとなめて見よう。』

ノアはその果を一粒とつてなめて見ました。中から汁がでてきて、とてもくおいしい味でした。

『ほウ、これはうまいものだ。こんなうまいものをたべたのは、はじめてだ。』

ノアは、のこりの果をせつせと取つてたべました。

ノアは農夫です。このおいしい果實を、そのままにたべばなしにしてはおきませんでした。

『これはよいものを見つけた。さつそく家へもつて行つて植ゑよう。』

ノアは、その根をほり取つて、家へもつて行き、畑の隅にうゑて、せつせと肥料をやりました。あくる年になると、その木は高くしげつて、蔓をだし、外の木にまきつき、青い葉が日をさへぎるほどになり、やがて果がなつて、紫色の房が、そこにもこゝにもぶら下りました。ノアの顔は大にこゝです。

『さあ、みんなに御馳走しよう。たべなさい、たべなさい。』

みんなは、集まつてきて、その果をたべました。

『お、おいしい、ほつべたがおちさうだ。』

ハムの子のカナンは、ほつべたをたたいてさういひました。

『ほんたうにおいしいものだ。エデンの園にあつた生命の木の果ぢやないかしらん。』
と、セムの子のエラムもいひました。

『はは、、、、生命の木の果が、そんなにちよつくらちよつと取れるところにおいてあるものかい。ばかなことをいつてる。』

とセムは笑ひました。

『生命の木の道には、燧の剣があるんだ。おそろしいぞ。』

とハムもいひました。

『何にしてもうまいものだ。お父さまはよいものを見つけなかつた。』

とヤベテもいひました。

その木は何の木だつたでせうか。それは葡萄の木だつたのです。

それから後、ノアはせつせと葡萄の木を植ゑました。そして、ひろい／＼葡萄畑が、
ノアの天幕のまはりにできました。

三、ノアと葡萄酒

ある時のこと、ノアは葡萄の汁をしばつて飲まうと思ひながら、ちよつと用事がで
きたので、飲むことを忘れてゐました。四五日たつてから、葡萄の汁をいれておいた
壺を見つけて、はじめて気がつき、

『ああ、この間しばつておいた葡萄の汁だ。すっかり忘れてゐた。』

と、そばへよつて、壺の中をのぞきました。すると、ぶんとかうばしい香ひが鼻を
うちました。

『ほウ、どうしたのだらう。い、匂ひがするぞ。』

と、さらによく、壺の中を見ますと、その汁が、ぶつぶつと泡立つてゐるので
す。さうして、何ともいはれないよい匂ひが鼻をつきました。

ノアは、その汁をちよつと飲んで見ました。その汁は、ひどくすっぱい汁でしたが、

それを飲むと、からだ中があつくなくて、目がちらちらしてきて、頭がぼつとしてきて、何だか無上むじやうにいゝきもちになりました。

それは、葡萄ぶどうの汁じゆが、葡萄酒ぶどうしゆにかはつたのでありました。

『ウム、これはなか／＼よいものだ。もつと／＼こしらへよう。』

ノアは、たくさん葡萄ぶどうの汁じゆをしばつて、葡萄酒ぶどうしゆをこしらへました。さうして、時々それをのんでゐました。

『まあ、お父ちちさんは。あんなすつばい、まづいものを、よくめし上あがる。』
と妻つまはわらひました。

ある日のこと、ノアはいつもよりも餘計よけいに葡萄酒ぶどうしゆをのみました。さうして天幕テントの中なかにころがつてねてしまひましたが、夏なつのあつい日のことでありましたので、いつのまにか着物きものをぬいで、すつばだかになつてゐたのでありました。

その時とき、ひよつと天幕テントの中なかに入はいつてきたのは、ハムでありました。お父様おとうさまのすつばだかになつてゐるのを見ると、あわて、天幕テントの外そとに出でて来て、セムとヤベテにむかひ『まあ、ちよつと天幕テントの中なかに入はいつて見たまへ。お父ちちさんがよつばらつてねてゐるさまといつたらないせ。だらしない親爺おやぢだな。』
とあざわらひながら告つげました。

ハムのつつしみのないのと違ちがつて、兄様にいさまのセムは大さう親孝行おやかうかうでありました。弟かとうとのヤベテもよく兄様にいさまを見みならつて、お父ちちさんをうやまひました。

ハムは、だまつて天幕テントの中なかに入はいりました。ヤベテもそのあとにつゞきました。どうするかと思ふと、ハムはお父様おとうさまの着物きものを取り、ヤベテと二人ふたりで、その着物きものをもち、後ろ向きうしろむきになつて、お父様おとうさまのはだかを見みないやうにして、そつとそのからだの上に着物きものをかけてあげました。

四、呪ひと祝福

何も知らないと思つてゐたお父様は、いつのまにか目をさまして、このことを知つてゐました。ハムの大聲で、ねむりをさまたされたノアは、二人の子どもが、どうするかを見ようと、わざとねたふりをしてゐたのでありました。やがておきだしてきたノアは、三人の子をよんで、かういひました。

『カナン、詛はれよ、

彼は僕輩の僕となつて

その兄弟につかへん。

セムの神、エホバは讃むべきかな、

カナン、彼の僕となるべし。

神ヤベテを大いならしめたまはん、

彼はセムの天幕にすまはん。

カナンその僕となるべし。』

この言葉の意味を分りやすくいふと、

『カナン（ノアは、ハムの名をよぶのをさせて、わざとハムの子カナンの名をよんだのであります）は、父をうやまはぬ不届ものだから詛はれて、僕となり、兄弟たちに仕へるものになる。セムは神様に特別に祝福される。神様はセムの天幕におすまひになる。またヤベテも神様に祝福されて、大さうつよい民族になる。』

といふ意味であります。この預言は、すつかり中つて、ハムの子孫は早く亡び衰へ、セムの子孫からはすぐれた宗教が生れ、ヤベテの子孫はつよい民族になりました。それは次の巻にくはしくのべてあります。

第十五章 バベルの塔

一、シナルの平野

ノアの子孫たちは、さかんにふえはびこつて、また洪水以前のやうに、にぎやかな世界になりました。人間がそのやうに多くなるとしたが、世の中がわるくなり、ノアのやうな義しい人ばかりでなくなりました。洪水の前のやうな、悪い、よこしまばかりの世界ではありませんでした。神様をうやまふ人が少くなつてゆきました。チグリス川とユーフラテ川から、おし流された土でできてゐるシナルの平野は、たいさう土が肥えて、物がよくできるところでありましたので、ノアの子孫たちは、だんだん山地から下りてきて、シナルの野にあつまり、そこに住むやうになりました。ハ

の子孫にムニムロデといふつよい王様がでた頃には、シナルの野にはバベル、エルク、アッカデ、カルネなどのりつばな邑ができました。

その頃、人間はまだ人種がわかれず、言葉が一つきりでありました。それが、どうしている／＼な人種がわかれ、言葉がわかれるやうになつたか、それについて一つのいひつたへがのこつてゐます。

二、大きな塔

シナルの野には、アルメニヤの山の中とちがつて、石がたくさんありませんでした。で、人々は家をつくるのに困りました。その中に智慧のある人は、土をかためて火で焼き瓦や、煉瓦をつくることを發明しました。さうして、それでもつて家をつくりましたが、大さう丈夫で、すみよいので、みなそれをつかふやうになりました。はじめて瓦や、煉瓦をつかふことを知つた人たちは、面白くてたまりません。で、

やたらに家や、塔や、壁をつくつて見ました。お隣で家をたてると、此方でもお隣にまけないやうにと、もつともつと大きく家をたてる。さうすると、そのお隣でも又、それに負けないやうにと、一層大きい家をつくる、といふ風になつて、やたらに大きな家をたてることがはやりだし、あつちにも、こつちにも何百尺もある高さの家や、塔ができました。どうかすると、つくり方が下手なために、ひつくりかへつて、とんだ怪我人を出すことなどもありました。

その中に、物すぎな人たちは、さうだんをはじめました。

『どうだい、もつと〜大きな塔をたてようぢやないか。』

『天までもとゞくやうな大きな塔をたてようぢやないか。』

『さうだ、そこから天へのぼつて見ようぢやないか。』

『面白い〜。』

『そんな塔をたてたら、きつとわれ〜の名が後の世までのこるだらう。』

『さういふ塔があれば、第一、それが目じるしになるから、道にまよふやうなことはない。どこまで行つても又、こゝへ歸つて來られる。さうすれば大へん便利だ。』

『ぢやあ、さつそく始めよう。』

と、たくさんの煉瓦をやいて、塔の建築をはじめました。外の人たちも、それをきいて、大さう面白く思ひ、われも〜と集まつてきて、土をこねたり、火をたいたりいたしました。さうして、三年も五年もかかつて、とてつもなく大きな塔をたてました。

三、言葉の亂れと人種の分れ

いよ〜塔ができ上つたお祝ひだといふので、みんなが、その前にあつまつてきて、大さはぎをしてゐました。ところが、ふしぎではありませんか。その、大さはぎをしてゐるうちに、みんなの言葉が、ちつとも分らなくなつてしまつたのです。今ま

で、あたり前に話しをしてゐた、お隣りの人の言葉がたゞチイ／＼パツパときこえるばかりで、何が何やらさつぱり分らなくなりました。あつちでもこつちでも、言葉が判らなくなつたので大さはぎです。

『おや／＼、これは一體どうしたのだ。誰かおれの言葉がわかるものはないか。』

『おーい、誰か言葉の分るものはないか。』

と、てんでんにどなりまはりました。さうすると、そのさはぎの中でも、いく人づつか同じ言葉のものが見付かりました。さうして、同じ言葉の人同志あつまつて、話をしました。外の人たちは、何をいつてゐるのやらさつぱり分りませんでした。

『どうです、妙なことになりましたな。言葉が分らなくては、一緒にすんでゐてもつまらない。私達は私たちだけで、どこか別なところに、一緒にすむことに致しませう。』

『左様、それがよろしいでせう。では、さつそくどこかよい土地を見付けて引越をい

たしませう。』

と、それ／＼相談をしあつて、てん／＼に思ひ／＼のところをさして別れてゆきました。東へ／＼と進んで、インドから、支那の方へといった人もあります。西へ西へと進んでアラビヤから、エジプト、アフリカの方へいつた人もあります。更に北へ北へと進んで、ロシアから、ヨーロッパの方へうつつていつた人もあります。さうして、それ／＼かはつた國に、かはつた生活をするやうになりました。住めば都のたとへにもれず、それ／＼の國に、それ／＼よいところがあつて、シナルの平野におとりませんでした。故郷戀ひしいと思つたのは、たゞ一時のこと、つひには皆忘れてしまひました。その中にそのすむところにしたがつて皮膚の色や目の色までかはり人種の相違ができるやうになりました。

これは、神様が、人間を世界中にちらし全世界を人間にあたへるといふ、ふかい思召によつたことであります。言葉が亂れて分らなくなつたといふ意味から、この土

地のことを、後々までも、バベル（亂れ）とよぶやうになつたのであります。

四、セムの子孫

セムは大洪水の時に百歳でありました。大洪水のあと二年目の時長男のアルバクサデが生まれました。セムは五百年生きてゐたといはれます。

アルバクサデの長男はシラといひました。シラの子はエベル、エベルの子はベレグ、ベレグの子はリウ、リウの子セルグ、セルグの子はナホル、ナホルの子はテラ、テラの子はアブラムであります。そのアブラムには、特別に神様のお恵が下りました。そのことは次の巻でお話いたします。

解 説

父兄及び教師のために

昔々、まだ人間のきはめて幼稚であつたころ、われ／＼の祖先たちは、人間の起源につき、世界のはじまりについて、いろ／＼な想像をたくましくし、その空想からあみ出した事柄をば、それ／＼劇的な物語につくり上げました。これを稱して私どもは神話、または傳説といつて居ります。世界の多くの民族が、みなそれ／＼さうした神話をもつてをります。日本人は『古事記』や『日本書紀』にあらはれたやうな神話をもち、印度人はマヌ典や、ウパニシャッド等にのこされた神話をもつてをります。ギリシャの神話は、雄麗壮大なイリアッドや、オディッセイによつて、チユートン人の神話は、雄渾幽幻なエッダ文學によつて、ケルト人の神話は、美しきマビノゲオンに

よつて後世につたへられて居ります。その外、世界各国に、さまざまな創世神話があり、それらの特徴をもつて居るのであります。

それらの神話は、科學的に考へて、何等の價值あるものではありません。歴史的事實といふものも、極めて僅少の部分に過ぎず、ほとんど皆無であるといつても差支へありません。けれども、それらが非科學的であり、非歴史的存在であるがために、文化史的價値が皆無であると考へたならば、それは大なる誤りであります。如何にとなれば、それらの神話は、民族の精神を表現したる、一種の象徴藝術であるからであります。それらの神話の中には、長き世紀にわたる民族の生活が反映されて居るのであります。それは歴史的に見て事實譚ではないけれども、精神的に見て眞理を含んでゐるのであります。

さて、私が茲に取扱ひましたところの、創世記について申し上げますと、創世記第一章より第十一章に亘る部分は、傳説的分子の多い創世記中でも、最も傳説的分子を多

く含んでゐるので、歴史的事實といふべきものは極めて少く、その大部分が神話であります。しかしながら、創世記の神話は、他の凡ての民族の神話と比較して、また、全然特殊なものをもつて居ることを知らなければなりません。それは單に民族の精神を表現する象徴藝術として、他の神話と共通的な價值があるばかりでなしに、他の神話から嶄然として超越してゐるところの、すぐれた價值をもつてゐるのであります。それはどういふ點にあるかと申しますと、第一にはそれが自然神話でないこと。第二には一神教の信仰が萌芽してゐること。第三には道德的要素が豊かであることであります。さうして、それがために、他の民族の神話が高閣に束ねらるゝやうになつても、ユダヤ神話のみは、宗教的教訓の豊かな資源として、生まれ、愛讀せらるゝ所以であります。次ぎに少しくはしく、それらの點をお話いたしませう。

創世記は自然神話ではありません。外の國の神話を見ますと、自然神話の要素が、

最も多くを占めて居ります。自然神話といふのは大昔の人が、自分の人格を推して以て自然物に及ぼし、自然界の活動を以て、人間界と同じく、意志のある活動であると考へ、そこに劇的な想像をほし、にして、つくりだしたところの神話であります。さういふ神話においては、太陽であるとか、月であるとか、暴風雨であるとか、さういつた自然物は、すべて神格化され、それらが華々しい活動を演じて、面白い物語を構成してゐるのであります。日本の神話に於ては、太陽は天照大神として、月は月讀命として、暴風雨は素盞鳴尊として現はされて居ります。北歐神話中の多くの巨神は、皆霜であるとか、雪であるとか、風であるとか、北地の自然力の人格化であります。創世記に於ては、全然さういふ自然神話の分子がありません。宇宙を司るものはたゞエホバ神あるのみにして、自然は凡てエホバ神の創造したまひしところのものであります。

かく一神的信仰が、思想の中心をなしてゐることは、實に創世記神話にのみありて、

他の神話に見るべからざるところなのであります。嚴密にいへば、創世記に於ても、神を呼ぶにエロヒム(複數)といふ言葉を以てし、或は、神自らよび給ふに「我等」といふ言葉を以てするなど、幾分多神的に聞こえるところもあるのではあります。しかしエホバ神としての神格は、一にして分つべからざるものとなつて居るのであります。かくの如きはたゞユダヤ神話のみに見得らるゝ特徴であつて、他國の神話は、皆多神教の信仰をあらはして居ります。それは日本に於いて、人間の祖先を凡て八百萬の神といふ名を以て呼んだ類とはちがひ、人間と相對して、多くの神を設け、これを崇拜してゐるのであります。

さうした無数の神々を想像するからには、それらの神々に凡て美しく、崇高な、神聖な屬性を附與するわけにはゆきません。したがつて、それら他國の神話に現るゝ神は極めて下等な神々であります。ギリシャの神々が如何に不道德な神々であるかは、おどろくべきものがあります。それに比べて、ユダヤ神話に於けるエホバ神は超然と

して人類を支配する正義の神であります。勿論、創世記といへども、極めて人智の開けない時代の産物でありますから、其の記事の中には、極めて幼稚な、神人同視的思想があらはれて居るところがないではありません。たとへば、

『是に於いてエホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へたまへり。』

『エホバ言ひたまひけるは、視よ民は一にして皆一の言語を用ふ、今既に此を爲し始めたり、然らば凡て其の爲さんと圖惟ることは止め得られざるべし。いざ我等降り、彼處にて彼等の言葉を亂し、互に言葉を通ずることを得ざらしめん。』

といった様な、極幼稚な、未開な神観が、ところ／＼に痕跡をあらはしてゐるのであります。がさうした部分的欠點は、大昔の書物において到底免れ得ないことであります。このやうな些細な點を除いて、創世記にあらはれたる神は、ギリシヤや北歐の神話に於ける神々とは全く異つた、偉大なる、唯一の創造者、支配者であるのであります。

凡ての神話が、たゞ古代未開民族の、精神的記録として、考古學的に取扱はるゝのみなるに反し、創世記神話のみが、深い宗教的教訓の書として今日にまで其の激刺たる生命をもつてゐることは驚くべきことといはなければなりません。此の點に於てわれらは最も深くユダヤ人に感謝しなければならぬのであります。創世記にあらはれたる神話の起源は、極めて古いものでありませうが、それが今日の形を取るに至つたのは恐らく紀元前數百年のことでありませう。その長い間口碑的に傳へられ、斷片的に記録せられた、さうして恐らくは多神的色彩の多分に混淆して居つたらうと思はるゝそれらの傳説が、ユダヤ精神を以て飾られ、他の古代民族の神話中に類例のない、りつばな宗教文學として遺るに至つたことは、全人類に對する大きな恩恵であります。自らユダヤ人であるハイネは『ユダヤ人はエルサレムを失ひ、神殿を失ひ、契約の櫃を失ひ、黄金の器其他ソロモン王の寶物を失ひたることを悲しみます。かくの如き損失は、彼等が保存したる不朽の寶聖書に比すれば言ふに足らざるものなり。』といつて居

りますのは、至言であります。たゞに創世記のみならず、凡ての舊約文學は、たしかに基督教の搖籃であります。舊約文學の背景なしに基督教を考へることはできぬのであります。

舊約文學中でも、殊に創世記の始めの部分は、その資源となつて各素材、ことにE典とJ典との記事の矛盾が多くありますから、それらを矛盾なしに、且つ面白く讀ませるやう論述するには、多大の努力を要するのであります。それから又、此の部分には、意味不明の章句が少からず散見するので、それらの取扱にも中々骨が折れるのであります。以下少しく本書編述の上に於て、讀者の疑問となるべきやうな點につき、説明を下すことといたします。

創世記第一章より第十一章までに録された記事の内容は次の通りであります。

一、天地創造と安息日の由來

二、人類の創造と其の墮落

三、カイン族の歴史

四、セツ族の歴史

五、大洪水

六、ノアの子孫の系圖

七、バベルの塔

之等の傳説は、從來全くユダヤ民族にのみ獨特なものと思はれて居たのであります。が、バビロニアの楔形文字によつて遺された天地創造譚や、大洪水譚が発見せらるるに及び、聖書の記事は、バビロニアの傳説の變形であると信するものが多く出來ました。今日に於ても、之等の傳説を研究するには、必ずバビロニアの傳説が引合ひに出されるのであります。なるほどバビロニアの楔形文字文學は舊約聖書の成立時代よりは遙に遙に古く、イスラエル民族のまだ出來ぬ時代に於て既に成形してゐたもので

あり、さうして、舊約聖書の記事と、バビロニヤの文學との間に甚だしい類似、(その一例をあぐればノアが方舟から鴿を放つ個所に相當する次の句の如き)

其の時我れ鴿を出して

之を放ちやりしに

鴿は翔れり

此方彼方を

されど休むべき所なかりしかば

再び歸り來りぬ。

次に我れ燕を出して

之を放ち遣りしに

燕は翔れり

此方彼方を

されど休むべき所なかりければ

再び歸り來りぬ

次に我れ渡鴉を出して

之を放ち遣りしに

渡鴉は翔りて

水の退きたるを見

ついはみ、歩き、啼き騒ぎしが

再び歸り來らざりき。

がありますから、バビロニヤの傳説を以て舊約聖書の資源であると考へたのも無理はないのでありますけれども、又決して左様斷言し得られるものではないのであります。何故かなれば、聖書の記事と、バビロニヤの傳説とはたとへその形に於て類似してゐるとはいへ、その精神に於て全く異り、一は多神的、他は一神的、一は非道德的、

他は道徳的で、その色彩の全く異なるものがあります。のみならず、大洪水の傳説の如きは、單にバビロニヤ、ユダヤのみに止まらず、ギリシヤに於いてはデューカリオンの大洪水があり、北歐に於てはイミルの大洪水あり、支那には禹の大洪水あり、アメリカ土人、メキシコ土人、南洋土人等皆大洪水傳説をもつて居り、しかもこれらが著しい類似をもつて居りますから、ひとりバビロニヤの傳説が、聖書の資源であるといふことは出来ません。傳説の世界には新らしいものはないのであります。殊に聖書の成形はユダヤの王國時代以後に屬するとはいへ、その資源たりしところのものは、それ以前に於て既に存在してゐたものであり、其の資源の又更に資源となつたところの、ユダヤの口碑は、ユダヤの民族の發生と同時に發生したるものでありますから、單に文字となつたことの早いと遅いとを以て、その起源の古いと新らしいとを論斷することはできぬのであります。アブラハムや、イサクや、ヤコブや、モーゼは、舊約聖書がなかつた故に、ノアの洪水をも、エデンの傳説をも知らなかつたと考へるものがど

こにありませうか。日本に於ても、大古文字なかりし幾百千年代の歴史を、大安麻呂が筆録するまで、幾十代に亘り口傳へに傳へて來たのであります。創世記の傳説は、一般に近代の學者の説く様な新らしいものではないことを斷言してよろしいであらうと思ひます。かくいへばとて勿論聖書の記事が、バビロニア説話の感化をうけてゐることは否まれません。

さて天地創造の話は、他の民族の同様な創造譚に比べて、遙に合理的であり、又完全な體裁をもつてゐることは注意を要することでありませう。ギリシヤの神話に於ては、大初天地未だ割れず、たゞ渾沌あるのみであつたが、渾沌漸く分れて天地を生じ、地神ゲーア、天神ウラノス生れ、それよりタイタンと稱する巨人族が生れ、次に巨人族と神々との争闘が起つたといひつたへられて居ります。北歐神話に於ては、太古天地未だ造られず、唯大なる空谷あるのみなりしが、その空谷を満たしむる重く厚き霜の

中より霜の巨人イミルが生まれました。イミルは鹽と霜の塊を嘗めて生きてゐましたが、ある日霜の中から人間の頭髮が出で、第二日に頭部が現れ、第三日に身體が現れました。これが最初の神でこれをツリといひます。ツリの子ビヨル、ビヨルの子オーデイン、ファイリ、フイの三人あり、イミルを殺し、その死骸をか空谷の中央に運び、之を以て世界を造りました。その肉を以て陸地とし、骨を以て山とし、血を以て海とし、骨の破片や、齒や顎を以て陸及び小石を造り、頭骨を以て天を造り、腦漿を以て雲としたといひます。かういふ傳説に比べて、創世記の創造譚が、いかに秩序整然としてをり、堂々たる體裁をもつて居るか、殆ど比較にならぬものがあります。ババロニヤの創世神話に於てすら、天神と地神との争鬭など、醜い記事に満ちて居るのであります。

創世記の創造譚は、そのやうに秩序整然として居り、藝術的にも均整美をもつて居りますが、しかし科學的にこれを説明することはいかゞでありませうか。科學的にも

十分に説明が出来るといふ人もあります。よく説明が出来れば面白いでありませう。しかしながら生兵法は大傷の基でありますから、下手な科學的説明は、むしろ無きに如かぬかも知れません。著者は、この點について多少考慮しました。單に傳説として之を記述することは容易であります。今日の少年少女の頭は、之に向つて多少の科學的説明を要求するであります。さりとて十分な科學的説明をなし得るの自信もないのであります。(勿論聖書が科學的に説明出来ぬとてそれは當然のことであります) それ故在來の聖書の解説者が解説しておいた範圍内に於てわづかな科學的説明を下しておきました。

次に人祖墮落の傳説に移ります。聖書に於ては人祖の墮落は蛇の誘惑に依ると記されてあります。けれども、萬物の靈長であり、諸ての生物の統治者である人間が、一昆蟲に過ぎざる蛇のために誘惑されて墮落したといふことは、いかにも辻褃の合はぬ

話であり、話としての興味がないのであります。そこで人間は、人祖墮落の理由について、單に蛇の誘惑といふ以外の、いろ／＼な傳説をつくり出しました。それはすなはち天使の墮落、さうして墮落せる天使が蛇の身中に入つてエバを誘惑したといふのであります。これは長い間、教會の傳説としてつたはり、今日に於てもカトリック教に於ては、之を教理の一つとしてゐるのであります。

天使が墮落して悪魔となつたといふことは舊約聖書に於ては、たゞエゼキエル書の中に僅な痕跡が見える外、はつきりとした記載がないのであります。さればこの思想は、恐らく俘囚時代前後に於いて發生したものでありませう。又、悪魔が蛇であるといふことも、新約黙示録にははつきりと記されてありますが、舊約書には明確な記載がありません。

しかしながら、長い間、基督教會の傳説として語りつたへられてゐる、これらの話を、全然除外することは、遺憾であるのみならず、また人祖墮落の因縁話としての興

味が如何にも乏しくなりますので、著者は特にエデンの園の記事の中に、天使の墮落と、悪魔が蛇に入つてエバを誘惑したといふ傳説を採り入れました。故にこの點、聖書の本文と少しく異つて居ります。而してその資材としては、誰もがよく知つてゐるミルトンの *Paradise Lost* を採つたのであります。

Paradise Lost は、ミルトンがその天才を縦横に發揮し、あらん限りの想像力をもつて、天界と地界に亘る大争闘を叙したものであるだけに、構想至妙、益々出でて益々奇なるものがありますが、本書に於ては、ただ聖書の記事を面白く子供に讀ませるための補ひとして用ふるに過ぎませんから、そのモチーフの若干を利用するに止まり、煩鎖な挿話はことごとく除きました。たとへばサタンと、その身から出た『死』とが地獄の門で争ふ光景や、天使ガブリエルがアダムに警告を與へる話や、天使たちがサタンを追躡することや、エバの夢物語や、面白い場面の數多くがありますが、それらは凡て除き去り、聖書の記事の補足的説明として、最も必要なところだけを探つたので

解 説
あります。

失樂園の悲劇は、アベルの虐殺せられたことによつて、更に深められてゆきます。さうして、そのあとに、カインの裔と、セツの裔との歴史が來ます。

カイン族と、セツ族とは、同じやうな名がたくさんあつて、同一系圖を二つにあらはしたやうに見えますが、その内容はちがつてゐます。カイン族には、殺伐、横暴なカインの血が、終りまで語り、セツ族には、平和敬虔なセツの性情が、どこまでも残つて居ります。レメクは、カイン族での大立者であると同時に、その悪い性癖も群を越えて居りました。彼は最初の多妻主義者であると共に、人を殺すことを何とも思はぬ男でありました。レメクの子には、天幕生活をはじめたヤバル、音樂を發明したユバル、刀劍を發明したトバルカインなどがあつて、大に文明の進歩を示して居ります。レメクが一通りならぬ傑物であつたことは、之を以ても分るのでありますが、その精

神は墮落して居りました。

之に反し、セツの子孫の大立者であるエノクは、一生神と偕に歩み、つひに神に取られて見えなくなつた聖人でありました。經外聖典の中には、「エノク書」といふものがあつて、エノクの言行を録して居ります。それによればエノクは、人間の罪と、神の審判につきゆき届いた預言をして居ります。この書は、新約聖書ユダ書中に引用せられて居りますから、たとへ聖書正典の中に收められぬにしても、尊重すべき書物でありませう。エノクはまた天文、數學、文字を發明したと言ひ傳へられて居ります。

洪水以前の人類の世界に、善惡の兩極端の歴史があつたことは、面白いことでもあります。

さて第六章の一節から四節までに、

『人地の面に繁衍はじまりて、女子之に生るゝに及べる時、

解 説

神の子等人の女子の美しきを見て其の好むところの者を取りて妻となせり。

エホバいひたまひけるは、わが靈長く人と争はじ、そは彼等も肉なればなり、されど彼の日は百二十年なるべし。

當時地にネビリムありき、亦その後神の子ら人の女の所に入りて、子女を生ましめたりしが其等も勇士にして、大昔の名聲ある人なりき。』

といふ章句があります。これは聖書解説者のいつも説明に苦しむところであります。第三節は、前述した神人同視の思想をあらはしたもので、これはどうかした誤りで、二節と四節の間に、偶然混入したものでありますが、第一節と二節と四節とは、つゞいて一つの文を成してゐるのであります。しかし神の子等（天使たち？）が、人間の女と結婚して子を生ましめたといふ荒唐無稽な記事は、どう考へてもユダヤ宗教の精神に背馳するものであります。

私の想像を以てしますれば、これは他の國の神話によくある神人相婚（ギリシヤ神

話に於けるゼウス大神が日光に化し美女ダナエーと婚して英雄ベルセウスを生んだ如きはその一例）の傳説が、聖書の素材たる断片の中に混入したものであります。如何に考へてもユダヤ的色彩をもたず、また前後の記事と何等關係なき（尤もネビリムの名は出埃及記に見えますが）この章句は除き去つてよいものでありませう。それ故本書の中には、全く之を説かぬこととしたのであります。

さて次には洪水の話について述べませう。

基督教は人類が同胞であることを信じます。同胞であるとは、たゞ詩的な、抽象的な意味に於てではなく、實際凡ての人類が、二人の父母から出たものと信するのであります。さうしてその最初の父母をアダムとエバとするのであります。たとへアダムとエバの話には、譬喩的、象徴的分子を多く含んでゐるとはいひへ、また聖書の年代記は信すべからずとはいへ、人間が一つの祖先から出たものであるといふことを今日ま

で信じて来たのであります。

世界の各民族を通じて、傳説の形が著しく類似してゐることは、傳説の遊行性といふことによつても若干説明せられますが、私はこれを以て人類同祖の一つの證明であると考へるのであります。傳説の類似の數多き例の中でも、ノアの大洪水の話は最もいちじるしいものでありますから、こゝに少しく大洪水傳説について述べませう。

聖書研究者の爲に常に引合ひに出されるバビロニアの洪水譚には二た通りあります。一は史家ペロサスの筆に成るもので、一は楔形文字によつて遺されたるギルガメシの史詩であります。ペロサスによれば、大洪水の起つたのはバビロニアの第十代の王クシスツロスの時代で、神々のために洪水の來襲を預言せられ、凡ての動物を携へて舟に入り、洪水の難を逃れ得たのであります。ギルガメシによれば、人類の罪餘りに大なる爲、神はウトナビシムに警告して大洪水の來るべきを告げ、舟を造りて難を

避くべきことを命じました。果して怖るべき大雷雨、大洪水は來り、神々すら危険を感じ、イシュタル神も之を悔ゆるほどの大災禍となりましたが、ウトナビシムとその卒を連れたる動物は、よく洪水の難を遁れたのであります。

次にギリシヤの洪水譚をあげませう。人間の罪甚だ大なるを見て、ジュピテル神は大に怒り、之を滅ぼして、新らしき人間を造らんと欲し、神々を集めて評議をこらしました。その結果ジュピテル神は、雷火を以て世界を焼き滅ぼさうとしましたが、それでは却つて天をも焼き害ひはすまいかといふ懸念から、水を以て之を滅ぼすことにしました。雲を吹き散らす北風は鐵鎖をもつて縛められ、南風は空一ぱいに雲を送り、怖るべき大雨が降つて、忽ちに田野を沒しました。ジュピテル神は更に海神ネプチューンに命じ、河水を陸地に汎濫せしめ、また大地震と共に大海瀟を起して陸地を浸さしめました故、世界は全く水に蔽はるゝに至りました。魚は木の嶺に泳ぎまはり、錨は花園の中に下され、小羊の遊んだところには、海牛がをどりまはり、狼は羊とともに

に泳ぎ、獅子は虎と水中に争ひ、猪の力あるも、鹿の足疾きも、何の助けをもなさず鳥は翼を休むるところなきため疲れて地に落つる』に至りました。

この時、生き残つたのはデューカリオンであります。此人は、正義を守り、神を敬ふ人でありましたが、其の祖プロメシウス神より洪水の來ることを教へられ、ラルナックスといふ方舟をつくり、其の妻ビルラと共に之に乗つて難を逃れたのであります。舟はつひにバルナツリス山上に着きました。ジュピテル神之を見て、デューカリオンの敬虔と正義を思ひ出し、北風に命じて雲を吹き去らしめ、ネプチューンに命じて水を退けしめました。

At length the world was all restor'd to view,

But desolate, and of a sickly hue;

Nature beheld herself, and stood aghast,

A dismal desert and a silent waste — Ovid

かくてデューカリオンとビルラとは、新しい人類の始祖となつたのであります。

このやうに、ギリシャの洪水神話は、バビロニアの洪水譚と酷似して居ります。

北歐の洪水譚は、これと少しく異つて居ります。北歐では、兇惡なる巨人たちに向つて、神々が憤りを發し、之を懲らすべく戦争を開始しました。さうして巨人中の最大なる巨人イミルを殺し、その血管を開きたるに、其の血流れて大洪水を起し、全地を蔽ひ、巨人族を滅ぼし盡し、たゞベルゲルミルといふ巨人のみを残したのであります。ベルゲルミルは其の妻と共に、大風車の軸によりて洪水の難を遁れました。さうしてその子孫たちは永久に神々に敵するものとなつたのであります。此の神話に於ては、一般洪水譚の形の外に、北歐神話の特徴たる自然力の象徴化、化成神話等の色彩が豊かであるために、ちよつとノアの洪水譚とかはつて見えますが、仔細に觀察すれば其の構想は同一であります。

印度の大洪水譚は、マヌの洪水譚と稱するものであります。ヴァイシヌ神は魚に化

してマヌに現れ、七日以内に大洪水の来るべきことを告げ、舟を造らせ、七つの聖物と共に之に乗つて難を避けしめました。洪水は数年の間大地を蔽ひ、舟は神魚の角に結び付けられて難を免れてゐましたが、遂にヒマラヤ山巔に止まり、これより新らしい人類の世界が出来たといひ傳へて居ります。

かく、インド、バビロニヤ、ユダヤ、ギリシャの如き近邇して生存する民族、またチュートン人の如く、人種的に近い民族の間に、同一の洪水譚あるは、不思議でないかも知れません。しかし乍ら、之等の人種とは遙に離れて存在し、又人種的にも相異の多いアメリカ土人中にも、同様の洪水譚は極めて多いのであります。メキシコの傳説においては、ノアに相當する人物はコックスコックスとよばれ、其の妻と共にサイブレッス樹の幹に乗つて難を逃れ、クルファカン山上に漂着し、新らしい人類の祖先となりました。トルテック族及びアズテック族はその子孫であるといひ傳へられて居ります。

洪水説話は、このやうにほとんど世界的にゆきわたつて居り、さうしてその中に、次のやうな共通な諸點をもつて居ります。

- 一、洪水のあつたのは世界の始めの頃であること。
- 二、洪水の原因は人間の墮落にあること。
- 三、特に擇ばれた者の外はことごとく亡びたこと。
- 四、擇ばれた人は舟に乗つて避難したこと。
- 五、擇ばれた人は後の人類の祖先となつたこと。

傳説の相似といふことは珍らしくありませんが、このやうに微細な點まで、殊にその精神に於いてまで一致してゐることは珍らしいのであります。そこに、此の話が、いかに深い宗教的意義を含んでゐるかといふことが窺はれるのであります。人間の心の奥深いところに存在する自覺、罪に對する怖れ、不義に對する義憤、新世界に對する憧憬といったやうなものが、此の説話において、最も切實に現はされて居るのであ